
【遠山キンジに憑依？ だが俺は俺のやりたいようにやるだけだ！】

とある世界の思春期男子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【遠山キンジに憑依？ だが俺は俺のやりたいようにやるだけだ！】

【Nコード】

N2844Y

【作者名】

とある世界の思春期男子

【あらすじ】

人生が終わってようやく消えると思った主人公。しかし彼の思いは外れ、第2の人生が憑依という形で始まる羽目に。しかも憑依したのは根暗で女難有りな『緋弾のアリア』主人公の遠山キンジだった！ だが彼は自分のやりたいように生きることを決意。果たして彼を中心とした世界ではどのような出来事が巻き起こるのか？ 物語が、今、始まるうとしていた

第1幕 憑依？ 別にいいがチートは嫌だ！（前書き）

この作品は作者の思いつきで描く二次創作です。

不満があれば迷わず退場することをお勧めします。

「別にこれぐらいなら全然大丈夫」という方は進んでください。

ちなみに結構真面目には書きますが、不定期更新ですので予めそのような点は頭の隅に置いておくようお願いします。

第1幕 憑依？ 別にいいがチートは嫌だ！

これを見てる奴ら、単刀直入に聞くぞ。 人生ってのは一体何だと思うか？

ある奴は幸せになるために神が与えてくれたチャンスだと言った。

別の奴は長い道のりの先にあるものを見るための旅みたいなものと言った。

更に別の奴は神が与えた試練や幸せを肌に感じることに言った。

聞いた後で悪いが、俺はこの三つはどれも正解だと思うし不正解とも思ってる。

多分俺が今言ったことは意味不明だと思った奴ももちろんいるだろうな。

当たり前だ、俺が言ってるのは滅茶苦茶だってことぐらい。だがそれが今俺が質問したことの答えだと俺は思ってたんだよ。

人生ってのはサイコーに愉快なものもあればクソつまんねえものもある。

愉快に笑えちまえるものがあればシリアスで全然笑えねえこともある。

神を有りがたいとか思い奴がいれば恨むような奴もいる。

人生サイコーとか考える奴もいれば人生サイアクとか思う奴もいる。結局は人それぞれがどう感じるかってことが一番重要なんだろうな。

で、俺の場合は残念ながら後者のクソつまんねえもんだって事。どいつもこいつも他人を見下す屑の集まりの中に俺がいた。

んでいつの間にか、俺という存在は消えちまってたっただけの話。別に同情してほしいとか哀れんでほしいから言ってることじゃねえ。

そもそも俺の人生には何の価値もないような空っぽなもんだった。だから別に思い残したことなんざねえし、恨みや悲しみもねえ。

そもそも俺は他人どころか自分の親や兄弟も、

そして自分自身にも興味関心を示さなかったようなヤローだ。

もともと空っぽだった俺の器が今さっき壊れただけってことだ。

別に俺はこのまま消えようが苦しみを味わおうがどうでもいい。

ただ思いつきり、二度と目エ覚まさねえようにずっと眠ってたいだけ。

……。
……。

これから俺が話すのはすべてまぎれもねえ事実だ。

嘘だと思うなら忘れろ、下らねえ話になるかもしんねえからよ。

ただこれを見ている奴ら……これだけは絶対に覚えとけ。

人生つてのはな、案外捨てたもんじゃねえかもしれねえ。

これから俺が話すようなことがもしかしたら起こるかもしんねえぜ。

「貴方は………本当に何も持っていないっしやらない空っぽな方なのですね」

俺がその良く訳が分からねえ女と出会った時に真っ先に言われた台詞だったな。

まあ普通の一般ピープルならここは反論する場面らしい。

誰かが言ってたような気がするがそんな事は知ったこっちゃねえ。

それに俺は反論なんかしねえ、女の言ったことが紛れもねえ事実だからだよ。

俺の人生なんざ聞いても損にしかならねえ屑みたいな一生だ。

この俺自身が言ってたんだ、確定事項でもう決まってたんだよ。

「んで誰だお前は？ 憐みとかマジでいらねえから。 というか、良く俺の面見てそんな顔ができるな。 テメエはお人よしすぎんじやねえの？ 後悪いけどさつさと俺消してくれないか？ 俺死んだんだろ？ だったら普通は存在自体を消すとか魂を消すとか天国か地獄かにブチ込んだりするもんだろ？ 俺人生とか興味関心一切ねえしいい加減寝たいんだよ」

辺りを見渡しながら俺は女の方を見ずに言ってる。

今の台詞は俺の残ったすべての感情を込めたもんだ。

嘘偽りなんざ一切持ち合わせてなんかいいえ。

人生なんか俺にとっちゃ何の意味もなさねえようなガラクタだ。

まあそれは俺自身がガラクタみたいな醜い人形っただけだろうがな。

「そんなことはありません！」

「いやいやいやいやいや。 何勝手に人の頭ん中覗いてくれちゃっ

てんの？」

この女、意外とやり手みたいだがかなり失礼な奴だな。

人の考えてる事を盗み聞きとかマジであり得ないんだが。

まあ、別にあの女がニュー。イプっっーんなら別に覗こうが構いやしねえ。

だがな………ニュータ。イプ以外は断固拒否だ！

コーデイ。ーターだろうがイノ。イターだろうがさせるかあ！

お前らは分かるか！ 分からねえよな！ そんなもん俺だって分からねえよ！

今一瞬自分が何考えてるか分かんなくなっちまったよ！

隠すところがおかしい？ なんてそんなこと知ってるかだと？

………そんなもん俺が一番聞きたいわ！ なんかの電波受信しちまったんだよ！

一瞬脳内にドラゴンスクリューとか訳分かんねえ単語が出ちまったよ！

今俺自身でも自分がおかしくてイタイ野郎だって気付いたよ！

なんなんだよ俺！ さっさと消えろよ俺！ 後ステイブン・セガ
ー！ー！ー！

「……で、お前一体誰なんだよ？」

「いきなり振ってきましたよね！？ なんなんですかそれは！？」

「うるせえ！ さつさと俺みたいな屑を消してくれって言ってるんだよ！」

「聞いてませんし待つてください！ 一旦落ち着きましょう！」

「マヨネーズと醤油を合成した物を口にねじ込んでやるあああああ
あ！」

「だから落ち着きなさいって言ってるでしょう！」

女が思い切り俺の脳天をチョップなんかしやがった。

何なんだこの女は。マジで失礼な奴だな。

さすがの俺でも初対面の奴にチョップなんかかまさねえぞ。

ま、初対面の奴に火をつけたことはあるんだがな。

あれは綺麗だったなあ。俺が人生で初めて感動した瞬間だった……

……ような気がしたぜ。

一応付け加えると過去形、今は何とも思っていないねえぞ。

。ちなみにもう一回チョップされて血がぴゅーぴゅー出てる（現在形）

痛いからもうバカはかまさないように……いや別にいいか。

これなくなったら俺マジでゴキブリ以下になるし。

……いや。元からゴキブリと結構張つてた人生歩んだな、俺は。

「まあいいや。それでお前は誰なんだ？」

いきなり話を振ってやる俺。

その様子を見て女は何やら頭を押さえている。

頭痛か？ 大変だなwww

「笑わないでください！ ……後、私は最上級神のアテムです」

「へー……最上級神ねえ。んで、なんで俺みたいな奴の所に？」

「むしろ貴方だから私が来たのです」

俺だから？ どういうことだ？

俺は別に特別じゃなけりゃあ普通でもない、劣等な人間だぜ？

魔法。高校の劣。なら間違はなくウィー。的ポジションだぞ？

完全なる雑魚キャラよりも雑魚キャラなんだぞ、俺は。

なんでそんな奴のところにくる必要があるんだ？

……あ、多分分かったわ。この女が俺の所に来た理由。

「からかいに来たのか？ 大変な悪趣味を持っている最上級神だな」

「違います！ 私は貴方に第二の人生を与えるために来たんです！」

第二の人生だと？ 何言つてんだよこの最上級神様は。

俺は一度生きていた世界で死んだ人間、つまり死人だぞ。

いくら最上級神だからってそんなもんが通るはずねえだろうが。

寝言は寝ていいやがれってんだ。

「つーか、なんでそこまで俺にこだわるんだよ？俺はゴミ屑みたいな人生を今まで歩んできたんだぜ。んでやっとなんで終わりのにまた惨めな人生やり直せってか？もしそうだったら、神だろうがなんだろうが殺しにかかるぞ？」

「だ、か、ら、違います！第二の人生は漫画かアニメ、もしくは小説の世界に行ってもらうんです！勝手に勘違いしないでください！」

「はあっ！？んなもん出来るわけねえだろうが！」

「だからそれが出来るんです！まずは話を聞いてください！」

ツチ！このままじゃ八方塞がりってやつか。

仕方ねえから話を聞いてやるとするか。

てか俺の態度ってでかいよな？相手は神なのに。

まあ気にしなけりゃあ大丈夫ってやつか。

俺敬語使うのとかマジで面倒で嫌だったし。

「いいですか？貴方の人生は、正直言って空っぽです」

「ああ、自分でもそう思う。ゴキブリでももうちょっとマシだな」

「……………それですね。さすがに貴方をこのまま魂を消してしまふ訳にはいかないと神の会議で先ほど決まったところなんです。だから貴方には第二の人生を送ってもらいますよ」

「今思っただけどさ、なんでそんなことすんの？」

「え？ な、なんでって」

「俺みたいな生きること何の執着心も持たない駄目男より、現実世界で苦しんでいる奴を何とかしてやったりは出来ないのか？ そっちの方がよっぽど有意義だと俺は自分で自負しているし、俺が地獄に行くことで世界中の腹減ってるジャリ達の腹が膨れるなら俺はいつだって行くぞ」

「そう！ それです！ そこですよ！」

「え！？ どこ！ 何！ 何か起こったの！？」

辺りを急いで見渡すが何も起こっていない。

本当にこの最上級神様はおかしな奴だ。

なにが「そう！ それです！ そこですよ！」、だ。

俺のことをおちよくってんのか？

「別に何も起こってねえじゃねえか」

「……やはりとは思いましたが貴方は鈍感なのですね」

「人の好意ぐらい気付くわ！ 死ぬ前はそんなこと記憶があった時は無かったがな！」

「威張ることではありませんよ。……私が貴方に、第二の人生を送ってもらいたいと思ったのは貴方のその心の優しさに感動したからです」

「はあああああつ！？　俺が優しいだつて！？」

あり得ない、こいつの言ってることは嘘っぱちだ。

大体俺は他人はおるか自分さえを拒絶するぐらいの奴だつたんだぜ。そんな奴が優しいさなんか持つてるわけねえだろ。

大体そんな冗談誰が信じるっていうんだ。

知らんわ、そんな頭のおかしい奴を俺は知らん。

「では貴方はさつき私が第二の人生を送ってほしいと言った時に何と言いましたか？」

「……あれ？　俺、なんであんな俺らしくない事言つたんだ？」

自分でも全く分らない。

いつもの俺なら無視するか、拒絶するかだったのに。

いよいよ俺の脳みそも腐つてきた証拠なのか？

「貴方は心の奥に優しさを持っているんです。でも、長い間人と関係をほとんど絶っていた貴方はその優しさには気付けなかった。

そんなに優しいのに、あんな割に合わない人生はさすがに黙って見過ごせません」

「同情するより金をくれ！……といたいが今は意味ないな」

「折角人が言っているのに茶化さないでください」

「……分かったよ。そのアニメか漫画か小説かは知らないが、取り合えず二次元の世界に行つて第二の人生始めりゃいいんだろ？　行つてやるよ。どうせ断つても無理やり飛ばすんだろ？」

「よく分かりましたね。　大正解ですよ」

いや、別に正解しても全く嬉しくなんかないんだけど。
後そのドヤ顔みたいなのは今すぐ止めてくれ。

むかつく要素しか入ってないから。　殴りそうだから。

「んで、どこの世界に行きやあいんだ？」

「それはあなた自身が決めてください。　私が決めるのではありません」

「……あのなあ……お前は俺の生前の人生知ってるんだろ？　だつたら俺がそんな本を読まなかったことぐらい知ってたんだろうが。アニメも見てないし漫画や小説も読まない。　やってたのは筋トレとか勉強だけだぞ」

「だから話は最後まで聞く！　……いいですか？　まず、この資料の中から好きな世界に行ってもらうので、目を通してください」

そう言つて資料を手渡される。

えつと……そこにあつた二次元の世界は……

『機動戦士ガンダムSEED』　『IS【インフィニットストラトス】』

『生徒会の一存』　『とある魔術の禁書目録』　『緋弾のアリア』
『機動戦士ガンダムW』　『これはゾンビですか？』

……良く分からない上に突っ込みたい部分がいくつかあるな。
その代わりかは知らないが大まかな説明が色々と書いてくれてはい

る。

まあいいや。それに免じてこの際軽く流しておいておこう。
しかし迷ってしまうな。うーん……………お！
この世界とかいいかもしれないな。

「決まりましたか？」

「それじゃあこの『緋弾のアリア』っていう世界にしてくれ」

「ちなみに理由を聞いてもいいですか？」

「こういうガンアクションを一度やってみたいと思ったんだ（八歳の時）」

「男の子なんですな」

ええい！ そんな微笑ましそうな表情でこっちを見るな！
いいだろ別に！ 男だったらそういうのに一度は憧れるんだよ！
ちなみに俺が憧れたのは八歳の時だな！

「それでは次に憑依する人物を決めてください」

「憑依？ そこは転生とかじゃないのか？」

「貴方の場合だと元の世界と同じ人生を歩む可能性が出てしまいま
す」

ああ、なるほど。納得したわ。

つまりその世界の登場人物ならある程度ブレても修正が効くと。
本当にありがたい限りですね。全くそうは思いませんがっ！

「……それじゃあこの遠山キンジって男で」

「???? 普通は不知火亮とかじゃないんですか？」

「こんな扱いあり得ない。なんで悪くもないのにコイツは責められまくってんだ？ だったらいつそ俺が自由気ままにやってそれなりの評価にする」

「なんか地味に優しさが混じっているので複雑です」

さつきからうるさいぞ最上級神。
人がそう決めたんだから別にいいだろ。

「それじゃあ最後に特典を決めてください」

「特典？ なんでそんな物があるんだ？」

「なんでも他の神様達が人をたびたび死なせてしまうことがあるんです」

うわ、なんて迷惑な奴らなんだ。

他人の人生間違っちゃったで奪うなよ。

俺みたいな人生に意味を見出していない奴はともかく。

「その時にお詫びとして転生か憑依＋特典といった形で別の世界に送るみたいです。今回は例外なのですが送るなら同じように特典を付けると」

「じゃあまず……このヒステリア・サヴァン・シンドローム……」

えーと、ヒステリアモードだっけ？　これを自分が出したい時に出せるようにして、女に優しくなるっていう特性は消してくれ」

「いきなり微妙ですね。　ちなみに後特典を使えるのは二回ですよ」

合計で三回も使えるのか？

さすがにそれはサービスすぎとか思わないか？

下手すりゃ全部チートみたいな能力選ぶ奴が出てくるぞ。

俺はチートみたいなのはあんまり欲しくはないな。

そりゃある程度強くはしてほしいが最強は嫌だ。

全く面白みがない。　イコール行く意味が無くなってしまう。

「じゃあ二つ目は……　なんか超偵みたいな能力くれ」

「いや。　あの……　具体例は？」

「ないから困ってんだろ！　なにか付けてくれ！」

「うーん……　それじゃあドラゴンスレイヤーの炎の滅竜魔法でどうですか？」

「チートじゃないんだろうな！　チートだったら却下だ！」

「自分の目で確かめてください！」

と言われて何かの漫画を投げ渡される俺。
さっそく読んで行くと……　あったあった。

……　おお！　ちゃんとチートじゃない能力だ！
ちよっと強いような気がするけど別にいいや！

「じゃあそれでいい。で、三つ目だが……」

「三つ目は？」

「上手い作戦を立てられるような頭脳をくれ。いざという時のためだ」

「はいはい。……貴方みたいにチートじゃない能力ばかりを選ぶ人って案外少ないんですよ。本当にいいんですか？」

「チートは嫌だ。面白くなる」

「そうですね。それでは、行つてらっしゃい」

そう言われて急に意識が遠くなる。

ああ……最後ぐらいちゃんと礼でも言つとくか。

「あんがとよ……楽しんでくるぜ」

そこまで言つて俺の意識は完全に途絶えた。

最後に最上級神……いや、アテムが笑つたのは気のせいかな？

まあ何はともあれ俺は再び生きることになる。

そしてその世界で起きる出来事を俺はまだ知らなかった。

第2幕 嵐の前の一時 だが俺は気付かない！（前書き）

今回から原作スタートです。

気長に見守ってくださいるようお願いします。

第2幕 嵐の前の一時 だが俺は気付かない！

—— 急に空から小学生みたいなペチャパイ女が降ってくると思うか？

昨日見た映画とかアニメだったら降ってきていた。

ただしグラマラスな体型の女ばかりだったような気がするが。

まあ確かにアニメとか漫画のようなフィクションの世界だったらあり得るかもな。

【注意！ この作品はフィクションな上に小説の世界です】

だがそれは絶対に何かしらの不思議現象が起こる前触れ。

もつと良い場合では主人公になれる切符なのかもしれない。

だから一回でもいいから女の子が降ってきてほしい！

…… とか馬鹿な事考えていた奴や未だに考えている奴。

さつさとその甘ったるい考えを治すか、精神科に行つてその浅はかな精神を叩きなおしてもらつか、記憶を消失することをお勧めするぞ。

別に消失じゃなくて喪失でも大して変わらないから。だ。

別にテストには出ないからマークーとか引こうとするなよ。

まあ結局何が言いたいかつて言つたら、そんな考えは浅はかなものだつてことだ。

異議があるなら自分の脳みそフル回転させて考えてみればいい。

回転しすぎて変化球とか投げない様注意はしろ！

フオークはすっぽ抜けたらキャッチャーが取れない場合があるから

な！

……すまん、今は自重することにしよう。

急に女の子が空から降ってくる。

それは常識的に考えると、絶対にあり得ない話だ。

別の方向で考えると厄介な事に巻き込まれるかもしれない。

それはいきなり日常が非日常になるのと同じことだ。

もちろんそれでいいという奴は少なからずという。

フィクションならそれでいい。

だが俺達が生きているこの世界はノンフィクションなのだ。

【注意！ 何度も言いますがこの世界は二次創作でフィクションな上、語っている彼には主人公補正が付いています。彼がすることは真似しないようにしましょう】

現実でそれが起こった場合は迷わず無視して逃げる。

そんな女の子がまともなはずがない。

必ず危険で面倒なことに巻き込まれて人生が終わってしまう。

だから俺、遠山キンジは空から女の子が降ってきてほしくはない。

むしろ空から女の子なんて降ってくるなと思う。

この狂った高校には別に不満はない。

だから……だからせめて……面倒事に巻き込まないでくれ！

だが俺の人生は……そんな簡単には出来てないんだよな。

なあ神様、これは一種の試練でやつなんだろ？

じゃあ俺は……その試練をブチ壊す！（とある魔術の禁書目録風に）

あ、（とある魔術の禁書目録）の部分に伏字にするの、完全に忘れちまっただけ……まあ、なるようになるから、別にいいか。

……ピン、ポーン……

慎ましいチャイムと共に、俺の意識はマツハで覚醒する。
マツハとは言ってもそんな速さではないぞ。

あくまで表現の内の一つでユーモアなものを選んだだけだ。
バツハと勘違いした奴はまだ起きて間もないからだろうな。

ちなみにだが俺こと遠山キンジは元の人物に憑依している。
だが肝心なのはこれから憑依してるのはポイントじゃない。

憑依した日がな……原作開始曜日の前日ってどういうことだ、コラ。

そりゃ今まで接してきた奴の名前とかそれまでの記憶をくれたのは嬉しい。

身体能力も元の世界の俺と同じだったことを含めてもだ。

だが神よ……せめて三年前とかからどうにかならなかったのかね？

ちよっと怒ってたからムス力大佐風の口調になったじゃないか。

別に相手に三分の猶予なんか与えないけどね。
後あんなダサイ眼鏡は掛けないけどな！

まあそれはとりあえず置いておくとして、枕元の携帯を見る。
現在時刻は朝の7時ちょうど。
少なくとも後三十分は眠れる時間だぞ、これは。

「（誰だよ。こんな朝早くから……無礼な奴め）」

居留守を使ってやるという手もあるにはある。
だがこのチャイムの慎ましさにはイヤな予感がする。
一応服は着ているためそのままドアの方へ歩む。

ドアの覗き穴から外を見る。
すると——やはり。

「（……そっぴやキンジはこの女子に毎朝来てもらってたっけ）」

そこには——白雪が立っていた。
純白のブラウスに臙脂色の……何か忘れたものとスカート。
シミ一つ無い武偵高のセーラー服を着て、漆塗りのコンパクトを片手に、どこにそこまでする必要があるのか分からないがせっせと前髪を直している。

この少女、白雪は遠山キンジ（憑依前）に恋心を抱いている。
ちなみに幼馴染っていうよく有りがちな設定。
朝から幼馴染に起こしてもらって一体いつのギャルゲーだよ。
一部の男達に取ったらまたったものではないのは確かだろうな。
まあ俺がキンジになったからにはそれは実らないだろう。

俺は鈍感ではないがあまり女子に興味はないから。
おっとそこの諸君、俺はBLでもないからそこは注意しろよ。

とまあ現実逃避はこのぐらいにしておくか。

このままだったら永遠と深呼吸してるかもしれないし。
こういう部分は本当に訳が分からないヤツだと思う。

——ガチャ。

「……何やってんだよ白雪」

「キンちゃん！」

誰がキンちゃんだ！ 俺の名前は遠山キンジ。
せめて遠山君とかキンジ君とかで呼んでくれないか？
されるところ……なんかむず痒くなる。

あのそのぱあつとなつた顔も止める。
なんか変な電波受信しそうで怖いんだ。
その内俺の目で地上デジタル放送が映し出されても知らんぞ。

「頼むからキンちゃんは止める。 こっちは恥ずかしいんだからな」

「あつ……ごっつ、ごめんね。 でも私……キンちゃんのこと考えて
たから、キンちゃんを見たらつい、あつ、私またキンちゃんって……
…ご、ごめんね、ごめんねキンちゃん、あつ」

「すまないな。 期待した俺の脳みそが馬鹿だった」

とりあえず寮の部屋の中に入れてやることにした。
ずっと外にいてもらうのもなんだか気が引ける。

それにここは男子寮、女子は普通は来ない。
それも取り合えず言っておく必要があるな。

「ここは男子寮だ。あまり軽々しく来るなよ」

「あ、あの。でも私、昨日まで伊勢神宮に合宿で行ってて……キ
ンちゃんのお世話、なんにもできなかったから」

「しなくてもいい。俺は近所のクソジャリか」

「……で、でも………すん……ぐす」

「頼むから泣かないでくれ。悪くないのに罪悪感がわく」

あえなくノックアウトされる情けない俺。

仕方ないだろ、こんな状況になったのは初めてなんだから。
いや、遠山キンジ自身は今までに何度も経験したはずだ。

だが俺は遠山キンジではない。

つまり俺はまだ経験してないんだよ。

分かるか？ 分かれ！ 嫌でも分かってくれ！

「それで、今日は何をしに来たんだよ？」

「こ、これ」

俺はキチンと座るのが面倒だったため座卓の脇に座る。

白雪は正義正しく正座すると、持っていた和布の包みを解いた。

そして出てきた漆塗りの重箱を俺の前に差し出すと、蒔絵つきのフ

タを開ける。

そこにあつたのは……色とりどりの朝食だった。

ふんわり柔らかそうな玉子焼きから始まり、ちゃんと向きを揃えて並べたエビの甘辛煮、銀鮭、西条柿といった高級食材や白く光るごはんが並んでいた。

ごめん、憑依する前の遠山キンジよ。

お前はかなりのリア充だな。

俺の目から見てもお前はあまりにも女に恵まれ過ぎているぞ。
今なら武藤達の言いたいこともハッキリ分かったぜ。

「わざわざ作るの大変じゃなかったかの？ こんな豪華な料理」

「う、ううん、ちょっと早起きしただけ。それにキンちゃん、春休みの間またコンビ二のお弁当ばかり食べてるんじゃないかな……って思ったら、心配になっちゃって……」

「……すまない。お前に心配かけちゃってたんだな」

そう。

実際に遠山キンジは春休み中にコンビ二弁当ばかり食べていた。料理すらまともにできないのかと、俺ですら思った。最近の男も料理はできるほうがいいんだぞ。

こんな好意は無駄には出来ない俺は有り難くいただく事に決定。ちなみにこの作ってくれた料理、滅茶苦茶うまい。

俺がそうやって食べている間、白雪は正座したまま頬を桜色に染め

てうつむき、更にはミカンをむきはじめている。
どうやらそれすらも俺にくれるらしい。

さすがに礼の一つも言わなければ無礼だろう。

俺はミカンを口の中に頬張りながら白雪に向き直る。

「すごく美味かったぞ。 いつもいつもありがとう」

「えっ。 あ、キンちゃんもありがとう……ありがとうございます」

「なぜ俺がありがとうと言われるんだ。 あと三つ指はつかなくて
もいい。 とうかつかないでくれよ。 土下座しているように見
えて仕方ない」

「だ、だって、キンちゃんが食べてくれて、 お礼を言ってくれたか
ら……」

たったそれだけで人は感謝をするものなのか？

俺、今初めて知ったぞ。

でもそれ本当かどうかはかなり微妙そうだなあ。

今度不知火にでも聞いてみるとしよう。 武藤は無理、多分笑うか
ら。

「そういうものなのか…… まあいいか。 ごちそうさま」

俺は綺麗に入れ物を片付けて白雪に差し出す。

俺がそれをしていた間に白雪は取ってきた物を手渡してくれた。

それはソファーにさっき俺が放っていた武偵高の学ラン。

正直あまり着たくない、ダサイから。

「キンちゃん。 今日から一緒に2年生だね。 はい、防弾制服」

俺は仕方なく学ランを綺麗に着る。

すると今度は食卓テーブルの上に置いてあった拳銃も持ってきた。こっしらみると、白雪はお母さんとかむいてそうだな。

職業としては保育園か幼稚園の先生とかも危なげなくこなしそうだ。

「……別に今日ぐらいは銃は持たなくてもいいんじゃないのか」

「ダメだよキンちゃん。校則なんだから」

「白雪よ、校則ってのはな。破るために出来てるようなもんなんだよー!」

「キンちゃん。嘘はダメだよ」

と、白雪は両膝についてこっちのベルトにホルスターごと帯銃させてしまう。

校則……『武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づける』、か。

お前らの予想通り、この武偵高は普通じゃない。普通の高校なら、こんな校則はあり得ないもんさ。

「それに、また『武偵殺し』みたいなのが出るかもしれないし……」

「——『武偵殺し』？ 白雪、なんだそれ」

「ほら、あの、年明けに周知メールに出てた連続殺人事件のこと」

ああ……確かそんなのもいたな。

たしか武偵の車やなんか爆弾を仕掛けて自由を奪った拳句、短機

関銃のついたラジコンヘリで追い回して海に突き落とす。
多分、そんな手口を使っていたヤツだっけか。

「だがあれは逮捕されたはず。まさか脱獄したのか？」

「し、してないけど……で、でも、模倣犯とかが出るかもしれないし。今朝の占いで、キンちゃん、女難の相が出たし。キンちゃんの身に何かあったら、私……私……ぐす……」

うへえ……朝から嫌なことばかり言うなよ。

それじゃあ遠まわしに俺が襲われるって言ってるようなもんじゃねえか。

だが……もしそうだった時は武器が必要だな。

仕方がない。とりあえず持つて行つておくとしますかねえ。

「分かった。ちゃんとバタフライ・ナイフも拳銃も持つていく。
だからもう泣きやんでくれ。お前の泣き顔なんか俺は見たくない」

そう言いつつ俺はバタフライ・ナイフを棚から出してポケットに収める。

これはキンジの兄の形見。無くすわけにはいかない。

白雪はなぜか俺をうつとり眺め、ほっぺたに両手をあてていた。

「???? どうしたんだ白雪。熱でもあるのか」

「……キンちゃん。かつこいい。やっぱり先祖代々の『正義の味方』って感じだよ。ああ、キンちゃん本当に素敵」

「やめてくれ。正義の味方なんて肩書、俺には必要ない」

俺は白雪の手に持っている黒い名札を貰ってつける。

武偵高では4月には生徒全員が名札を付けるルールがある。

そんな部分までこまめに守るとは、さすがは生徒会長で園芸部長で手芸部長で女子バレー部長で偏差値75の超人的しつかり者だな。憧れる生徒もさぞかし多いことだろう。

「すまないが俺はメールをチェックしてから出る。先に行つてくれ」

「あ、じゃあ、その間にお洗濯とかお皿洗いとか――」

「それじゃあお前が遅くなる。生徒会長なんだ、もう少し自覚を持て。そんな事をして遅れでもしたらお前自身の評価が下がるんだ。それに他の生徒にも示しが付かない。俺みたいな問題児のことは放っておけよ。必ず行くから」

「……は、はい。じゃあ……その。後でメールとか……くれると嬉しいです」

「分かった。なるべく早くするよう心がける」

そう言うのと納得してくれたのか、白雪は部屋を出ていく。

悪い子じゃないんだがちょっと礼儀正しすぎるな。

そう考えながら俺はPCの前に座ってメールやWebを見る。

そしたらいつの間にか7時55分になってしまっていた。

しまったな、これは58分のバスに乗り遅れたぞ。

まあ別にいいか。チャリなら十分に間に合うだろう。

——生涯。

生涯、俺はこの7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだろう。
なぜならこの後に空からペチャパイ女が降ってきてしまったんだから。

神崎・H・アリアという、厄介な女がな。

第3幕 止めて止めて！ マジで死ぬから！

——急にセグウェイなんて意味不明な物に命を狙われると思うか？

よう、おはようかこんばんわだ諸君。 今更なんだが俺だ俺だの前田の俺だ。

遠山家に生まれてから17年ぐらい、遠山家次男の遠山キンジくん
だお。

取り合えず一番上以外の意味不明な紹介文は謝っておこう。
ん？ 一番上の文章の意味は何なのかって？

まあ待ちたまえよ。何事も待つのが肝心だ。

かの有名な偉人、織田信長公や豊臣秀吉公は言いました。

「人間、待つことはとても大切。待つことは動くことよりも困難だ」と。

はいすみません、冗談です大ウソです出鱈目です。だからそんなに怒らないで。

パソコンの電源今すぐシャットダウンしてやるとは言わないで。

この小説の評価点下げてやるとは言わないでええええええええええ！

【謝罪：憑依した遠山キンジ君が大変メタな発言をしました事を、心よりお詫び申し上げます。反省はしますが後悔はしません。

本当にすいませんでした。これからこのような事があると思います。自重はなれますが、そこは広い心で見守っていただきたいです。by 駄作者】

まあ、本題に入るとしようか。

うん、『お前が脱線の原因だろ』とか言う感想は一切受け付けておりません。

ここは穩便に済ませて下さい。そろそろ真面目にしますから。

え……今回なぜ俺の迷言から始まったと言いますとね。

現在の俺の状況があ言葉に当てはまるんですよ。

いや……やっぱ信じてくれませんよね、こんな説明じゃ。

でもマジなんですよ実際は。

今この瞬間も俺死ぬ可能性大ですからね。

どのくらいか例えるならエボラウイルスに感染した時ぐらいの致死率。

ちなみにエボラウイルスは感染したら90%の確率で死ぬぞ。

気を付けろよ。あれはマジで怖いんだから。

あ、また脱線したな。

というわけで今の俺の状況を少しだけお見せしよう。

じっくり見なくても音声で大体分かるから。

はいじゃあよーいスタート。

「ぎゃあああああ！　死ぬってマジで！　マジで死ぬから止めて！」

「だったら　さっさと　死にやがれ　でありやがります」

「嘘だろおおおお！　なんで俺が武偵殺しに狙われなきゃならん

のだあああ！」

「煩いで やんす さっさと死んで 地獄か天国に いくでやんす」

「語尾が明らかにおかしくなってるうううううううう！」

「発射準備完了 直ちに 標的を 撃ち殺してやる でやんす」

バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ
ッ！！

→
→ ↓サブマシンガンを俺に向かって連射した時の発砲音

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ッ！！

→
→ ↓その時発せられた俺の情けない絶叫の声（涙も出てる）

うん、さすがに君達も分かってくれたかな？

リアルに俺の命が危なくなってるってこと分かったよね。
今この瞬間にも燃え尽きるかもしれない俺の命のことを。

何気に平常心みたいだけどそれは心だけだよ。

いや、心も平然を装っているだけでかなり動揺してるよ。
もう正直泣きそうだよ。ていうか泣いてるよ。

ていうかそもそもなんでこんなことになったか説明しておく必要があるな。

あれは俺が寮を出てチャリで登校している時のことだ。
そこで……そこであんな事があったがために今の俺がいる。
どうやらこっちの世界でも俺はあんまり運が無いみたいだ。

後さ……未だにサブマシンガン撃たれまくってんですけどおおおお
おおおおお！

助けてくれー！ 誰でもいいから、暇があっても無くても助け
てええええ！

俺マジで死ぬからアアアアア！ イヤアアアアアアアアア！

【時刻 8 時 現在自宅からチャリで出たところ】

——雨が降ったら、その雨を全身くまなく浴びて楽しめ——
と言ったのって確かアルチュール・ランボーだったか？

……いや……なんかちよつと違うような気がしなくもない。
俺の記憶力に多少のミスがあっただんだな、きっと。

負け惜しみもそこまでいけば笑うしかないな。

まあその通りだったら今の俺は笑われている訳だが。

「遅れるかもな……まあ元々問題児だし大丈夫かな」

パソコンをされていてバスに乗り遅れたおバカな俺。
仕方なくランボーの言葉に習ってチャリで風景を楽しみながらの登

校。

じゃあないだろ、行かなきゃ遅刻なんだから。

取り合えず暇だから軽く説明でもしておこうか。

俺が今から向かう東京武偵高の実態を少しだけな。

【東京武偵高に関係することについてのちょっとした説明】

・東京武偵高はレインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形の形をしている人工浮島の上に建っている。

・学園島とあだ名されたこの人工浮島は、『武偵』を育成する総合教育機関。

・武偵とは凶悪化する犯罪に対抗して新設された国家資格で、武偵免許を持つ者は武装を許可され逮捕権を有するなど、警察と同じような活動が可能。

・ただし警察とは違い、武偵は金で動く。金さえもらえるならば、武偵法の許す範囲内ならどんな荒っぽい仕事や下らない仕事でもこなす。

・一言で言い表すとすれば『便利屋』という表現が一番正しい。

・また東京武偵高では、通常の一般科目に加えて、その名の通り武偵の活動に関わる専門科目を履修することができる。

取り合えず今回はここまでにしておこう。

また時間があればもっと別の事も説明する。

俺は体育館へ向けてチャリをターンさせる。

良かった、なんとか始業式には出られる時間帯だ。

しよっぱなから遅刻なんてしゃれにも話にもならないからな。

「その チャリには 爆弾が 仕掛けて ありやがります」

「え？ 何て言った？ チャーリーとチョコレート工場がなんだつて？」

「その チャリには 爆弾が 仕掛けてるって 言ったんで ありやがります」

……………これってさ、あれだろ。

だだの……………いたずらだとかの類のものだよな？

俺に向かって言ってるやないよな？ 通行人とか他にもいるよな？

「チャリを 降りやがったり 減速させたら 爆発 しゃがります」

しかもこの声、今ネットで人気急上昇中のボーカロイド。
あれで作った声なんだろう。

そんな分析をしてから、印象に残る一部分を脳内で再生。

———爆弾が爆発する……………だと？

一体何の冗談だよ。 何時代の嫌がらせだよ。

眉を寄せて周囲を見回すと、俺の自転車にはいつの間にかやらかな物体が併走してきていましたよ。 ちよつとそこのお兄さん、信じられますこの状況。

しかもその併走してきた物体が物体だけに思い切り引く。

車輪を平行に並べただけで器用に走る、タイヤつきの力カシみたいな乗り物。

こいつはいつかのテレビに出てたやつだ。

『セグウェイ』とかいう乗り物だったはず。

「助けを 求めては いけません。 使ったら 爆発 しやがります」

「…… しかもサブマシンガン付きとは豪華だなあおい」

セグウェイは無人だったが、人が立って乗るべき部分には結構小さなスピーカーと—— UZIと呼ばれるサブマシンガンが一丁設置されていた。

ちなみにUZIとは、秒間に10発の9ミリパラベラム弾をぶつ放しやがる、イスラエル社の傑作短機関銃だ。

最悪だ、完全にこれは武偵殺しの模倣犯だぞ。

混乱しながらもチャリを急いで調べると—— あったよ。

サドルの裏にいつの間にか変な物体が仕込まれてるよ。

落ち着けと心の中で念じながら指で変な物体をなぞってみる。

—— ますます最悪だ。 型までは分かんがプラスチック爆弾みたいだ。

それもこの大きさ。

自転車どころか自動車でも跡形もなく消し飛ばせるぞ。

しかも今回ののは世にも珍しいチャリジャック。

全然頭の中になんか入ってなかったぜ。

自分のチャリに爆弾が仕掛けられるかもしれないなんて思いがなあ。

「ていうかさあ……なんで俺なんだよおおお！」

この直後、俺とセグウェイの鬼ごっこが幕を開けた。
決して面白くもなるともない。

命の危険しかないからそこんとは注意してくれよ。

【現在進行形 時刻 8 時 5 分】

まさかセグウェイがあんなに速いとは知らなかった。
いや、知らなくても無理ないか。

誰がこんな展開なんぞ予想できただろうなあ。

朝からセグウェイに追っかけまわされて、おまけにサブマシンガンで狙われ撃たれで命の危機がすぐそこまで迫ってくるようなバッドな朝なんて。

つーか何？　なんで俺みたいな生徒が狙われる訳？

なにか憑依する前のキンジ君が恨まれちゃうようなことした？

そりゃ武偵は恨まれやすいって聞いているけどさ。

「（落ち着け落ち着け。何か手はあるはずだ）」

必死にチャリをこぎながら策を練る。

瞬間、二つほどいいかどうか分からない策が練りあがる。

「（まずはベレッタで銃口部分に弾をブチ込む……ああ、無理だよクソッ！　昨日他の練習してて銃の練習してないから成功確率は低い。だったらチャリからセグウェイに飛び移ってバタフライ・ナ

「イフで切り裂くつてのは……ダメだ。絶対に飛び乗る前に銃で撃たれてあの世行きだ）」

完全到手詰まり状態のまま朝の第二グラウンドに近づく。運が良いのか悪いのか、いつも通り誰もいない。仕方がないのでその入り口目掛けてチャリをこぐ。

その時だつた。

俺の頭が瞬時に妙案を思いつく。

俺が憑依する前に貰ったあの能力。

滅竜魔法が使う滅竜魔法の一つ、炎の滅竜魔法。

あれならこの距離からでもセグウェイを破壊できるんじゃないのか？

「（幸い人はいない。練習もした。これならやれる！！）」

決まったらとなれば即実行。

チャリをこぎながらセグウェイの距離と技のタイミングを計る。

「はい？」

ちょうどその時だった。

俺はこのありえない状況の中、更にありえないものを見た。

グラウンドの近くにある七階建てのマンション——確か女子寮だったはず——の屋上の縁に、女の子が立っていたのだ。

武偵高のセーラー服に遠目でも分かるピンクのツインテール。

そしてその女の子は——急に飛び降りた。

「（oooooooooooo！飛び降りちゃったよおおお！）」

一瞬ペダルを踏み外しかけたが慌ててこぎ直す。

ツインテールをなびかせながら宙に舞う女の子は――
事前に屋上で滑空準備させてあったらしいパラグライダーを空に広げる。

しかもこっち目掛けて降下してきた！

「（っ！ まさか銃でぶっ壊すのか。 だったら頭を下げないと）」

俺は邪魔にならないために急いで頭を下げる。

その行為はすぐに正解だったと気付く。

少女はブランコみたいに体を揺らしてL字に方向転換したかと思うと、右、左。

左右のふとももに着けたホルスターから、それぞれ銀と黒の大型拳銃を二丁抜いた。

「その生徒！ そのまま頭を下げてなさいよ！」

バリバリバリバリバリッ！

セグウェイを容赦なく銃撃したよ！

不安定なパラグライダーからの正確な二丁拳銃の水平撃ち。

もちろん敵は反撃する間もなく撃沈。

恐ろしいぐらいに洗礼された技だな、ホントに高校生か。

くるっくるくる。

二丁拳銃を回してホルスターに収めた少女は、今度は、ひらり。
険しい表情のまま俺の頭上に飛んでくる。

そうだった、まだ安心なんかできないんだった。

俺のチャリのサドルの裏には爆薬がひつついている。

建物を破壊させるのには十分なぐらいの量がな。

俺は第二グラウンドへ入る。

「来るな！ このチャリには爆薬が積まれてるんだ！ それも車が
消し飛んじまうぐらいのだ！ 後は俺だけでどうにかするからお前
は離れてくれ！」

「——バカっ！」

俺の真上に陣取った少女は……げし！

白いスニーカーで俺の脳天を力いっぱい踏みつけてきた。

「武偵憲章一条にあるでしょ！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ！』
——いくわよ！」

少女は気流をとらえてフワツと上昇する。

華麗なパラグライダー捌きに、俺は踏まれた悲しさやむなしさも忘
れてその光景を見上げてしまっている。 決してパンツが見たいん
じゃないぞ。

その運動神経のすごさは認めるが、スパッツははいて
今は見えなかったけどいつか見られるぞ。

ていうか、『いくわよっ！』とは言われたのはいいが。

一体全体あの少女は何をする気なんだ？

俺を助けてくれるのか？ ——いや、どうやって？

少女はグラウンドの対角線上めがけて再び急降下しこちらに鋭くU
ターン。

そしてさっきまで手を引いていたブレークコードのハンドルにつま
先を突っ込み、逆さ吊りの姿勢でこちらに向かってきた。

そのままものすごいスピードでまっすぐ飛んでくる。

都合、俺は少女に向かって走るような形になった。

「……マジでか。まあいいや。乗ってやるよ！ その方法に！」

俺は少女の意図が分かり全力でこぐ。

少女は俺が意味を理解したと気付くや否や、

「そのまま飛び付きなさい！」

「了解！　ありがとよ、お嬢さん！」

俺はかなりの至近距離まで少女に近づく。

そーういや昨日見たアニメ映画にこんなシーンがあったと思う。

でもあって、男と女の位置が逆だったような……

そう考えた瞬間——上下互い違いのまま俺は少女と抱き合った。そしてそのまま空にさらわれる。

そしてそのまま空にさらわれる。

息苦しいぐらいに頭が押し付けられた少女の下っ腹から、クチナシの薔のような、甘酸っぱいいい香りがした刹那――

ドガアアアアアアアアア
ンツツツ！！！！

閃光と轟音と、続けて爆音が辺りを支配する。

あ……やっぱりあの爆弾は本物だったんだな。

熱風に飛ばされながら俺達は仲良くグラウンドの片隅にあった小さな体育倉庫の扉に、減速なしで突っ込んでいった。

あのチャリ、買ったばかりだったんだけどな。

また買わなきゃならないから金が必要だな。
どうしてこうも俺は懐から金が出るんだろうね。
悲しいね、俺の気持ちと懐は。

第3幕 止めて止めて！ マジで死ぬから！（後書き）

主人公設定

遠山キンジ（オリ主憑依＋強化版）

学科：探偵科↓強襲科

武器：ベレッタ【キンジモデルカスタム？】×2

デザート・イーグル×1

バタフライ・ナイフ×1

特殊仕様の逆刃刀×1

竜炎補充用特殊加工小型火炎瓶×5

能力：ヒステリア・モード（現在一種類）

炎の滅竜魔法（現段階ではG8～G15）

主人公だった遠山キンジに死んでしまったオリ主が憑依した、いわゆる『強化版・主人公』のような感じ。

色んな人に対して甘い部分はあるが、その分かなり真面目な性格。それ故に嘘を付くことや隠し事が苦手。

憑依後は女性にやたらとモテるようになる。

バカなことも考えたりはするが実力もそこそこで、どんな相手でも立ち向かっていく。

頭は生前に勉強しまくっているためかなり良く、また体も生前に鍛えていたため通常モードではキンジの身体能力の約1、3倍。

また本人は知らないが滅竜魔法を使う際に体が耐えられるように体は滅竜魔道士並みの頑丈さを持っている。

キンジが元々『超偵』では無かったので原作序盤では人前で滅竜魔法を使用することをためらう節がある。

恋愛事には鈍感ではないものの、あまり知識を持っていない。

人の好意には素直に答えるタイプ。

やや不幸体質も持つが本人は気にしていない。

特殊能力解説

『ヒステリアモード』

元は性的興奮を感じると思考力・判断力・反射神経・などが通常の30倍にまで向上する遠山家の人間が持つ特異体質。

だが憑依後のキンジは神の力により自分でヒステリアモードを制御できるようにしてもらっているため、一つ以外は自由自在に使える。その代わり、興奮しても発現しないなどの欠点も存在する。

更に憑依後キンジが使えるヒステリアモードには通常モードの「ヒステリア・ノルマーレ」、死の危機に瀕した際に発現する「ヒステリア・アゴニザンテ」、女性を他の男性に取られた際に覚醒し、発現する「ヒステリア・ベルセ（ノルマーレの1.7倍）」、そしてオリジナルで、体力や魔力が極限まで消費している際、比較できない程滅竜魔法の威力を上げる「ヒステリア・オーガ」の四種類が存在する。

「ヒステリア・オーガ」以外は自由自在に扱えるが、他のヒステリア・モードの存在を知らないため今のキンジは「ヒステリア・ノルマーレ」しか使用できない。

『滅竜魔法』

竜迎撃用の強力な魔法。

滅竜魔法を使える者を滅竜魔導士と呼ぶ。ドラゴンスレイヤー

術者の体質を各々の属性の竜に変換しているため、身体能力も大幅に強化されている。

自らの属性と同じものを食べることで体力回復、強化が可能。

キンジは炎の属性なので火などが該当する。

また他の属性の物を食べるとその属性の力を炎の力と同時に使うことができるが、翌日に能力を使った強力な代償が現れる。

(例) ジャンヌ ↓ 氷炎竜

ヒルダ ↓ 雷炎竜

やばい……チートになったかも。

第4幕 あれ？ 意外と大人しいんだな……（前書き）

今回は……というか今回も駄目文です。
本当にすいません。

第4幕 あれ？ 意外と大人しいんだ……

「う……………っ。 痛ッてえ……………左肩打っちゃったか……………」

どうやら少しの間気を失っていたらしい。

俺は左肩に走った鈍い痛みと共に意識を覚醒された。

幸い打ちつけた程度だったため、すぐに痛みは引くだろう。

元の俺もこれぐらいならすぐに治ってたし。

というような感じですぐに辺りを軽く見渡す。

俺がいるのは薄暗い倉庫のようなところだと判断する。

ああ、そういえばさっき体育倉庫に突っ込んだんだ。

それでもって肩打ちつけたのは跳び箱だったらしい。

だが今はそんなことよりも買ったばかりのチャリのが悲しい。

まだ二ヶ月しかたっていないかったのに。

泣きっ面に蜂とはまさにこの事。

憑依二日目から某上。。麻さん並みの不幸に見舞われっぱなしだよ。

そっぴゃあ憑依してからはとことん運が無かったな。

初日から銃が暴発して頬を掠るわナイフを踏んで血が出るわ間違えて手から炎を出して火災になりそうになるわ何か変な請求書が来るわ。

もうこの時点で泣きそうになったね。

でもやっぱ運は回ってこないものだよな。

二日目になっても寮に白雪が来るわチャリに爆弾が仕掛けられて追い回されるわUIのサブマシンガンを連射されて何発か頬を掠る

わ。

もう鬱になるよ……一回死んでるから死んでも悔いないけど。

「(ていうか、さつきから良いにおいが鼻に入ってくるんだが……)」

そこまで考えようやく気付く。

俺を助けてくれた少女の姿が見当たらない。

急いで辺りを見渡すがそれらしき人影はない。

まさか……さつきのはハマ○ン・カ○ンだったとでも言うのかっ！

……いや、別にラク○ク○ンでも何でもいいけど。

とりあえず美人な人だったらどうでもいいんだけど！

「?? 何かさつきから重いような感じ……が………ハウッ！」

だが俺は直後に凍りつく。

なぜか……なぜか俺に人の体重みたいなのがかかっているな

とか思い、下を見てしまった。

するとどうしたことでしょう。

先ほどの女の子が俺に体を預けるような形になっているではありま
せんか。

それも俺と同じく気を失っている状態。

あの女子寮から飛び降りて、パラグライダーに乗ったまま戦い、俺
を空中にさらって助けてくれた勇敢な少女の面影などどこにもない。
どこにでもいそうな普通の女の子だった。

「（や、やばい……さすがに密着しすぎだろ……）」

少女が俺に体を預けるような形になっているのはまだいい。

【警告：見え方によっては襲っているように見えるので注意しましょう】

だが今の体勢はさすがにまずい。

分からないと思うから俺なりのレポートでまとめてみたした。

はい！ シルエットショーをごゆつくり鑑賞してくださいですだお！

俺のわき腹は彼女のふとももによって挟まれている。

両肩にも彼女の腕が巻きつくようになっていて。

結果的に言えば、俺はお姫様抱っこをしているような形になっていた。

一部の男子からはさぞかしうらやましいとか思われるだろうな。

ええ、なんでそんな事になって気付かないのかと思うでしょう？

俺も今思ったよ！ 思いまくって思いまくって涙そうそう！

すいませんでしたよ！ 意味が分かりませんよね！

手っ取り早く言えば全く気が付かなかったってことですよ！

しょうがないですよ、こっちもこっちで混乱してたんですから。

ちょっと敬語みたいになってしまったのがその証拠。

決して十八番ではないのでお間違えなく。

十八番だったら俺捕まって三倍の刑が下っちゃうからね。

「（うん、現実回避もそろそろ限界になってきたな。　っていうか

早く起きてくれないものか。さすがにヒスらないけどちょっと色んな意味で起きてほしいんだけど」

「（声を掛ければいいじゃないか『心の中の俺の声』）」

「（そ、そうだよな） な、なあ……起きてくれない？」

声を掛けてみるが答えは返ってこない。

未だに気を失い続けているようだ。

その目を縁取るのはツンツンと長いまつげ。

甘酸っぱい香りの息を継ぐピンクの唇は、桜の花びらのように小さい。

ツインテールに結われた長い髪は、細い窓から届く光に、キラキラ

……と豊かなツヤをきらめかせていた。色はピンク、それも珍しいブロンドピンクだ。

「ん？」

俺が少女を見ていると、彼女の名札が目止まる。

今日が始業式なので学年やクラスは未記入だったが、名前は書いてある。

ええと——『神崎・H・アリア』。

「（この子の名前か。でも珍しいな、名前に『H』が入ってるなんて）」

その名前を見た時、どこかで見たような錯覚がした。

しかしそれが何だったのかは思い出せない。

まるで無理やり記憶から消されたような。

そんな不思議な感じだけが、今は残っているのみ。

少しかわいい顔をしているとも思う。

と同時にいつまで経っても目を覚まさないことも心配になってきた。
そこで、思わず顔を覗き込む俺。

「（ほぐ……好きになる奴はなるんじゃないか？）」

だがそんな思考は一瞬で消し飛ぶことに。

なんとこのタイミングで少女が目を覚ましてしまった。

「……………へ？」

「……………ど、どうも……………」

同じ高校の奴に敬語を使ってしまった。

もう何この嫌がらせ。

神ってマジで俺を笑うためにこの世界に送ったんじゃないだろうな？

……………いやいやいやいや。勘違いはしないでね皆の衆。

目は速く覚ましてほしかったんですよ、ハイ。

ただね……………タイミングがおかしいぐらいに悪かったんです。

なんかすごいなぐ可愛いなぐ、とか思ってた少女の顔を覗き込んだ。

そこまではいい。いや、あんま良くないけど。

と・に・か・く……！！

そこで目が覚めたよう目で開けました。

はいっ！　ここで一体何が起ころうでしょうか？

答え：【襲われると向こうは思う。　または何かピーピーな事をさ

れると思った】

【謝罪：まいどまいどすいません。 慣れてくださいませ】

まあつまりそういうことです（どういうことだよ！ by 駄作者）。
で、何が起るかと言いますとね。

こういうことが起るので注意しましょう。

あ、取り合えず問題出します。

この後俺にどういった展開が訪れるでしょうか？

答えはウェブ……じゃなくてニュース……この後すぐで。

*少しの間、音声のみでお楽しみください【＼（。ロ＼（＼／ロ。
／】。

「へ……………へ……………」

「あ、いや、ちょっと！」「誤解はしないでくださいませお嬢さ」

「ヘンタイ———」！

「違うって！ 俺はヘンタイなんかじゃないしあんたを襲う気もない！」

「じゃ、じゃあなんであたしの顔を覗き込んで見てたのよ！」

「起きないから心配になったんだって！」

「声を掛けてくれたら良かったじゃない！」

「掛けても起きなかったから心配になって覗きこんだんだ！ 本当に悪い！」

答え：勘違いされまくって怒鳴られまくる（笑）

おい作者！

（笑）って一体どういうことだ！

俺の生死はそんな簡単に扱われるものなのか！

主人公補正があるっていつても限度って単語があるだろうが！

【謝罪：まいどまいど以下省略】

って突っ込み入れてる場合じゃねえ！

俺も俺で何クイズ形式で落ち着いて問題出してんだよ！

落ち着けるような場面じゃねだろ、今は！

「本当に悪かった！ 謝るから……痛ッ！」

再び左肩に鈍い痛みが走り、思わず押さえながら目を瞑る。
何かなってんのかと思って左肩の部分だけ服を脱ぐ。

そしたら……え？ 何かめっちゃ腫れてんだけど、左肩が。

あ、ヤヴァい。

こんなのを神崎の前で見せたら……

「え……か、肩……怪我したの？」

「だ、大丈夫だから！ お前のせいじゃないから！」

こうなるから嫌なんだよ！

前の世界でもこれで一回人泣かしてるんだから、俺よ。

あ、でもあの時は俺がリアルで泣きたかったな。

女の子庇って三トトラックに真正面から撥ねられたんだから。受け身取ったから右腕骨折で済んだけど。取り損ねてたら内臓破裂してたって話されたけど。

って今はそんな事どうでもいいよ。

頼むからあの子をどうにかしてくれ。

もうなんか『本当にごめんなさい』みたいな顔してるから。

「う、ごめんなさい……」

「いや、別に気にすんな。お前を受け止めた時に受け身を取り損ねた俺が悪い」

「……やっぱり……あたしの、せい……」

「だから違うつて！俺が未熟なのが悪かったんだつて！」

本格的に泣きそうになってるよこの子！

自信家ほど精神が不安定な生き物なんて……いるけど！

今のこの子はもっと不安定なの！分かって！

そこまで俺が考えた直後だった。

——ガガガガガガガガガンツ！！

突然の轟音が体育倉庫を襲う。

慌てて俺と神崎が音のした方を向くと——

UZIが七台、俺達の方に銃口を向けている。

「っち！ 神崎、ちよつと我慢しろよ！」

「えっ？ きゃ！」

俺は神崎を再び抱っこする跳び箱の後ろ側にすばやく移動。
直後に俺達がいた場所には銃弾が容赦なく撃ちこまれていた。
あ、危ねえ……なんて非日常だよ。
いや違うわ。 銃撃だった。

「うっ！ まだいたの？」

「あれって『武偵殺し』の所有物か？」

「う、うん……『武偵殺し』のオモチャよ」

「もちろん銃も」

「本物」

やっぱりそうかよ。

だったら跳び箱が防弾使用で助かったぜ。
普通の木製のなら貫通してOUTだったな。

「……だがそれならそれで気に食わないな」

「えっ？」

そうだろ？

あんな卑怯な手で人を殺すんだぜ。

完全にふざけているとしか言いようがない。

人の命は一つ、それなのに一体何を考えてやがるんだ。

そんな奴は……俺が捕まえて、尋問科に渡して尋問を受けさせてやるお！

「相手は七台か……神崎」

「な、何……？」

「今から見たこと、無かった事にしてくれよ」

「え！？ あ、ちょ、ちよっと……！」

神崎の言葉は続かなかった。

それはなぜか？

簡単だ、俺が空中に飛んだからだ。

「（今すぐなれよ！ ヒステリアモードに！）」

直後、目を瞑った俺の身体は一瞬熱に包まれる。

だが次の瞬間、目を開けた俺はすべてを理解した。
すごいよ……すごすぎるぜ、これは。

周りのすべてが自分の支配下みたいに感じるぜ。

ズガガガガガガンッ！

再びUZIは俺に向かって銃弾を浴びせてくる。

狙いはすべて脳とか心臓付近。

いい狙いだし、タイミングもいいな。

そりゃ空中にいれば格好の獲物だもん。
通常、人間は空中で行動は出来ないのが普通。
足場がない上に体がついていけないからだ。

「（無いならば、作ってしまおうホトトギス！）」

銃弾は全部で74発。

まさに絶体絶命のこの状況。

だが俺は変える力を持っている。

バタフライ・ナイフを少し前方に飛ばし、柄の部分に手を付ける。

そのままグルンッ！ と空中での一回転。

今ので38発は避けたな。

「す、すごい……」

なにやら感心するような声が聞こえた気がするが気にしない。

とはいえ残りは36発か…… まだ多いな。

残りを避けきれなければ俺はデッドEND。

だが神よ、俺はまだ死なんぜ！

「残念だが、俺には当たらない！」

今度はマットシルバーのベレッタ・M92Fを二丁引き抜く。

狙いはサブマシンガンが放った銃弾。

撃ってきた銃弾を撃ち落としてやるお！

ガガガガガガガガガガガガン！

合計で十六発、銃弾をベレから放つ。
その銃弾は様々な角度から俺に向かってくる銃弾に当たる。
あつという間に飛んでくる銃弾の数は6発に。
だがマガジンを換える余裕はない。
否、いない。

「火竜の、鉤爪！」

今度は横に一回転。

だがただ一回転したんじゃないぞ。
足に竜の炎を纏いつつ、銃弾を蹴りながら。
炎の蹴りを受けた銃弾は音を立てて燃える。
竜の炎は伊達じゃないな。

「今だ神崎！ マシンガン撃ってくる前に撃て！」

「わ、分かったわ！」

さすがは武偵。

この変わった状況に素早く対応してみせた。
その才能、ちょっと分けてはくれんかね？

ズガガガガンッ！

神崎の放った銃弾がUZIの銃座を破壊する。
だがまだ足りない、後一台残ってる。

「それでも上出来！ 火竜の、咆哮！」

口から炎を噴射し、残ったUZIもろとも銃を焼きまくる。
え？ 普通の人間は口から炎を噴かないって？
じゃあ俺は普通の人間じゃないってことだろ。
何はともあれ、俺達はUZIを無事潰せたらしかった。

「あ、あの……」

「うん？」

俺が使えなくなったガラクタ同然のUZIを拾っていると神崎が声を掛けてくる。

顔が少し罪悪感に染まっているのは気のせいではないだろう。

まださっきの事を気にしてるのか？

あんなの、別にいいのに。

「謝らなくてもいいぞ。 元々俺はお前に命を助けられてるんだ。

俺は感謝こそしてもお前を罵りはしないし出来ない。 さっきは助かった」

薄く微笑む俺。

それでもまだ神崎はバツが悪そうな顔をする。

俺はおかしくなり、神崎の頭を優しく撫でてやる。

なんか妹が出来たような感じがするな。

「ちょ、ちよつと……」

「じゃあーっしよう」

「え？」

「神崎がさっきの俺の事を黙ってくれたら、チャラにしよう。もし話したら」
も

「は、話したら……」

「その時は、バーンッ！」

神崎に向かって指で銃を撃つ真似をする。

神崎は驚いたような顔をして、俺の顔を見たり指を見たり。

あ、あれ？　なんかミスったのか？

「ぶ、くくく……」

「うおおおおおおおお……」

何か知らんけど笑われてる！

何これ何これ何て言う名の羞恥プレイですかこれは！

めっさ恥ずかしいんですけど！　穴があつたら入りたいんですけど！

「ふふふ……面白いのね、あんた」

「あんまり言われない」

とはいえいつまでもこうしている訳にはいかない。

話をしながらも作業をしていたおかげですぐに終わった。

「俺はこれから教務科に行って報告しないといけないからこれで」

手でジェスチャーをしながら言う。

神崎は……頷いてから俺に質問してきた。

「えっと、な、名前は？」

「俺？ 遠山キンジ、今は探偵科に所属してるよ。 神崎・H・アリアさん」

「あ、アリアでいいわよ」

「そうかい。 じゃあアリア……一緒にクラスになれるといいな」

「う、うん！」

元氣よく頷いてくれた。

それに笑顔で返しながら今度こそ教務科に報告しに行く。
アリアならそのまま教室に行くだろう。

……さて。

蘭豹や綴に何て話したのか。

体育倉庫を誤って一部燃やしてしまいました、とか。

ああ……俺がお空の星になるような図しか浮かばんよ。
ごめんよアリア。

もしかしたら、俺の寿命は尽きたかもしれん。

第4幕 あれ？ 意外と大人しいんだな……（後書き）

なんか拍子抜けするような出会いでしたらすいません。
ですから批判はなるべく穏便にお願いします。

第5幕 不穏な空気が漂ってるな……ていつかオリ展開（前書き）

今回は少し長めになりました。

後オリジナルの組織も出そうと考えております。

嫌な方はどうか抑えてくださるようお願いいたします。

第5幕 不穏な空気が漂ってるな……ていつかオリ展開

俺こと遠山キンジは現在保健室にいる。

前回の話で教務科に報告しに行ったんじゃないの？

みたいな考えを持つ人、安心しろよ。

ちゃんと教務科がいる職員室に行くには逝ったから。

ん？ 逝くの漢字がおかしいかって？

大丈夫大丈夫、全然大丈夫。それはそれでちゃんと合ってるから。

「たのもー！ 拙者は道場破りでござんすよ！」

「黙らないと殴るわよ。君、名前は？」

「遠山キンジです。今年から2年で所属科は探偵科ですけど」

「いや、別に先生そこまで聞いてないんだけど」

「そんな些細な事を気にしてたらすぐに老けますよ？ いいんですけど？」

ゴキメキバキボキズドドドンツ！

俺の腹からあり得ないような音が辺り一帯に響く。

そのまま俺の身体は薬品が並んだトレイの方向に飛んでいく。
冗談じゃない、薬品はあまり好きじゃないんだ。

空中で2回転して、トカゲのように天井に張りつく。

あのまま吹っ飛ばされ続けて薬品かぶるよりは遥かにマシだ。

ていうか保健の先生ってこんなに強かったのか？

後で不知火にでも聞いてみようかねえ。

武藤は……先生美人だから何か知ってるかもしれないな。

「君、ちよつと失礼だけど面白いわね。 体も頑丈そうだし」

「そう言う先生は滅茶苦茶強いっすね。 何か格闘技でも習ってるんですか？」

「拳法とボクシングとカポエラとムエタイ。 後は陰陽術」

「最後の陰陽術だけ今度教えてもらってもいいですか？」

「いいよ。 君はとっても面白そうだからね。 先生久しぶりに興奮しちゃった」

興奮するのはいいけどあんまり女性は言わない方がいいと思います。 変態とか思われちゃいますよ。

まあ、口に出しては言わないんですけどね、決して。

だってそうだろう。

あんな破壊力抜群のコークスクリューパンチなんて2度と喰らいたくねえよ。

危うく俺のユーモアあふれる意識が刈り取られるところだったんだぞ。

舐めるなよ、あの先生のコークスクリューの恐ろしい威力を。 間違いなく戦場の第一線で通用する代物だよ。

階級は間違いなく大佐。 あっという間に出世だな。

「先生じゃなくて優花さんって呼んでほしいな」

「心を読んだだどっ!? お主、見たところ中々の強者だな?」

「ふふふっ! 越後谷よ、お主も立派な悪よのう」

「それ越後谷と悪代官じゃないっすか! 後誰が越後谷だ!」

突っ込んでハッと気づく。

先生………じゃない、優花さんは嬉しそうに笑っている。

畜生、まんまと踊らされたって訳かよ。

どっちが越後谷でどっちが悪代官が分かったもんじゃないな。
俺と優花さん、どっちも越後谷でも悪代官でもないけど。

あ、ちなみに優花さんと今やってたのは一種のゲーム。

確か『先に突っ込んだじゃ負けよ、マイダーリン?』とか言うやつ。

考えたのはおバカな武藤よりもバカな奴。

後マイダーリンとかハートマークとか意味がわからん。

また暇があつたら脳細胞を50000個死滅させてやる。

「ま、取り合えず話を進めようか?」

「そうですね。これじゃあ夕方になっても終わりませんし」

自分達からやつといて何言ってんだ?

とかその他もろもろの批判なんかは受付ましえん。

文句があつたら作者にどうぞ。

俺は一切知らないから。だってほぼ無関係だしね。

「ここに來た理由は?」

「学校に来る途中にセグウェイなんて物に装備されていたサブマシンガンの嵐から俺を助けてくれた神崎・Hアリアという女生徒を庇って体育倉庫に突っ込んで上手く受け身が取れずに防弾仕様の跳び箱に左肩をぶつけてそれで左肩が腫れてたのと体育倉庫の一部を燃やしてしまつて報告と謝罪をしようとさっき教務科の蘭豹先生と綴先生の所に逝つた時に思い切りグーで殴られたので右の頬と太ももが少し腫れてて。それで何か良い薬はないかと思ひここに来ました」

「色々言いたいことはあるけど……取り合えず殴つていい？」

「横暴だ！　俺は今何も余計な事言つてないのに！」

やっぱりこの人、かなり怖いよ。

その内優花大佐とか変なあだ名が付いちやいますよ。いいんですかそれで。貴女は大佐でいいんですか。

信用と信頼は決してお金なんかでは手に入らないんですよ。

あれ？　信用と信頼って同じような意味だよな？

まあいいか。これも駄作者のせいにしておけば綺麗さっぱり解決だ。

「……まあいいわ。それでどこ？　見せて頂戴」

「あ、はい。この辺りなんですけど」

「どれどれ……キンジ君、一応腫れてるけどそこまでじゃないわよ」

「えー!?　マジすか!」

自分でも確かめてみるが優花さんの言うとおり。
腫れていることには腫れているのだが、あまりひどくはない。
自然回復能力にはいくらなんでも速すぎないか？

というか憑依前のキンジ君、そこまでのスペックなかったはず。
俺の身体能力も何か格段に上がってるみたいだし。
こりゃ神に一度聞いておいた方がいいかもな。
と言っても通信手段なんか無い訳だが。

「一応湿布でも貼っておく？」

「あ、じゃあ1枚だけ頼みます」

「1枚だけって……いくつ使う気よ？」

「いつもなら1か所に3枚ぐらい貼ってるんですけどね」

「使い過ぎ。資源が無くなってきたるんだから大切にしなきゃ」

「一体どこのお偉いさんですか、貴女は」

「過去に環境大臣になった経験があるわよ」

嘘付け、あんたがなれるわけないだろ。

ていうか未だにそんな大臣の役職が存在するのか。
そもそもそれってあったものなのか。

政治にはあまり興味関心が無かったから疎いな。
今度勉強しておくでしょう。

「っと……もう大丈夫でしょう」

「有難うございます。　それと優花さん」

「何かしら？」

「左後ろに毒を塗った短刀構えるのはいいんですけど……ばれればれますよ」

「っ！……嫌ね、キンジ君。　何を言ってるのかしら？」

さっきまでと同じように接してくる優花さん。

でも残念ながら、俺にはもうばれてますよ。

さっき一瞬だけ気付かない程度怯んだ。

そして大した反論もしてこないところを見ると、当たりのようだ。

ちなみに気付いた理由は二つある。

一つ目は俺に向けて飛ばしてくる微量な殺気。

本人は隠しているつもりだろうが上手く隠せていない。

まあ、俺だから分かったのかもしれないが。

そして二つ目は毒の薬品の臭い。

これは致死性の毒ではなく、恐らく神経毒。

多分斬ったら毒で痺れて動けなくなる

とかの方の神経毒が刃全体に塗りつけてあるんだろう。

しかし……これは困ったな。

目を付けられてるって事だからな、導き出される答えは。

俺が憑依していることは恐らくバレてはいない。

バレているなら自身の正体を明かし脅迫してくるはず。

これでこの線は消えた。

可能性があるとするれば、憑依前のキンジのカリスマ性を狙ったものか。

それともどこかの組織が命じた殺害が目的か。

あるいは……本当に俺の正体を見破った者の命なのか。

まあ、いずれにせよ今は警戒って事でいいか。

向こうも俺が今ので気付いたって事は承知の上。

慎重に物事を進めたいのが定石だろう。

派手にすればこちらが不利になる。

しばらくは様子見だ、良かったね優花さん。

「すみません。 ちょっと言ってみただけなんです」

「そう。 でもあまりそんな冗談は言っちゃ駄目よ」

「そうですか。 では俺はこの辺で」

「ええ。 またいらっしやい」

「暇があつたら。 ですけどね」

そのまま保健室を後にする。

なるべく早いうちにその場を去りたかった俺はあえて無視をする。自分を見ていると思われる二つの視線を。

「どうだった、優花」

私の名前を呼びながら、一人の女の子が保健室に入ってくる。
でもその声は今の私の耳には聞こえなかった。

なぜ、彼にまんまと短刀を見破られたのか。

それだけがさつきから気になっている。

私が放っていた殺気はほぼ0に近かったはず。

遠山キンジは確かに一種のカリスマ性を持っているとは聞いていたけれど、それはあくまで彼がHSSの状態になってからの話。
普通の状態だったら絶対に気付かないはずなのに。

「む……優花！ 聞いているの」

「へっ！？ あ、ああ……ごめんなさい柚。 聞いているわ」

「本当？ 何かぼーとしていつもの優花らしく無かった」

「わ、私らしく無かったかしら？」

「そうだよ。 いつも主導権を握るのに、今日は握られっぱなしだったし」

そういえば、そんな気がしなくもない。

彼はただふざけていただけのように感じた。

だから用心しなくてもいいと思ったけど、実際は違ったようね。

「しかし……遠山キンジ君、彼って何者なのかしら？」

「唯者では無いという事だけは確かですよ」

「え、円超君。早く降りてきなさい」

「了解」

華麗に天井から降りてきた青少年の頭を一発叩く。

何だか涙目になってるみたいだけど……気にしない方向で。元はと言えば円超君が悪いんだしね。

「それで唯者では無いってどういうこと？」

「簡単です。こちらの行動はすべて見破られていました」

「もっと具体的に」

「言うなれば、私達二名が見ていたのにも恐らくですが気付いています。そして優花さんの短刀にも気付いていましたし。何より目が違いました」

「目？」

「はい。最近のこの東京武偵高は唯でさえ緩いのに加え、更に緩くなっている傾向があります。しかし彼は少数のまともなグループの一人であるということ。目つきが明らかに違いました。まあ、一筋縄ではいかないような相手だということです。先ほども優花さんがどれくらいできるかなども計っておられたかと」

……あんな甘い判断をした自分がバカに思える。
話を聞く限りじゃあ相手の方が二手も三手も上。
よく手を出さなかったと自分をほめたくも思っわ。

「要するに？」

「今は慎重にいくべきかと」

「えゝ！ 柚があいつと戦って勝てばいいんでしょ？ じゃあ早い
じゃん！」

「敵は何かを隠し持っています。それが何かは分かりませんが…
…とにかく。これは一度ボスに報告しておくべきだと思います」

「……そうね。 じゃあ解散していいわよ」

「了解」 「ぶゝ……了解したよ」

そう言つて二人は保健室を後にし、一人残った私。
まずまず彼について興味が出てきたわね。

組織での話じゃなくて、個人的にも。

まずは彼の過去でも探ってみましようか……。

知らず知らずの内に私の心は躍ってしまっていた。

「ぶゝん……俺に目を付けてる組織がもうあるのか」

保健室に仕掛けてきた盗聴器から聞こえてくる三人の人間の会話。それを聴きながら俺はため息をつく。

だつて下手したら襲われたりするかもなんだぜ？

なのにテンションなんか上がるか。いつも通りだよ。

盗聴器は天井に張り付いた際に付けといた。

やっぱ正解だつたな、盗聴器付けたのは（笑）。

「それにしてもあの円超つて奴は中々のキレ者だな。あいつが欲しいな」

おつと待て待て。勘違いするなよ諸君。

二話辺りにも言ったはずだが俺は断じてBLじゃない。

健全な男女のあれとかは……まあ恋愛とかは一回してみたいと思う。

つてそうじゃないんだよ。

ただ単純に、円超がこつちに来てくれれば物事が有利になりそう。

つていう邪mana考えがあるからこそあいつが欲しいんだ。

分かるか？ いや、嫌でも分かつて。

でも優秀とは言つても盗聴器は見破らなきゃダメだろ。

あれ結構分かりやすいような大きさなのに。

直径三センチメートルの長方形なのに。

「まあしばらくは様子見つてことで。先はクラスに行つてからだな」

さつき職員室に行つた時に見せてもらったさ、俺のクラス。

悪くはなかったが別に良いつて事でもなかった。

そもそも憑依前のキンジ君根暗だつたから友達少ないし。

女子には何か嫌われている傾向みたいなものがあつたし。でもなぜか慕ってくれる人とかちよつとはいたり。

結構微妙な立ち位置なんだよな、主人公って。

目立てるけど疲れちゃうみたいだ。

まあそれを選んだのは俺だしそうしかたていう気持ちもある。

それに友達は今から作っていけばいいしな。

よっぽど嫌いな奴じゃない限りある程度仲良くはできるだろ。

初めは驚かれるだろうが、時がたてば自然となじむ。

どっかにありそうな天然素材とかと一緒にだ。人間の心は。

「ん？ あれはアリアじゃないのか」

さて。俺のクラスである2年A組の前に到着した。

そこでさっき知りあつたばかりの女子生徒、神崎・H・アリアと遭遇。

決して格闘などのコマンドはでないのであしからず。

「あ！ キンジ！」

「アリアよ。今クラスの方では何か話してるから静かにしようぜ」

「あ。う、ごめん」

しゅんとした所で体育倉庫の時のように軽く頭を撫でてやる。

すると顔を赤くしてわたわたと少し動揺した。

やべえよこれ。何か結構面白いぞこりゃ。

……げふんげふん。

今はそんな事をするような時間帯じゃなかったな。
取り合えず聞くこと聞いてクラスに入らねば。

「見たところアリアも俺も2年A組だ。やったな」

「うん！」

「でも教室の外で待つてゐるって事はアリアは転校生なのか？」

「え。　なんで分かったの？」

聞くところじゃないよそこは。

俺はね、転校生だつてことだけが聞きたかつたのに。

これはアリアに説明しなくちゃいけないな、簡単なのに。

「クラスが決まっているのに教室の外で待機。　何か怒られてしまつたんならそれも有り得るだろうが今日は始業式なので普通は怒られない。　だったら転校生とかスパイとかしか考えられない」

「スパイも考えられないわよ」

「鋭い突っ込みだな。　また今度頭を撫で撫でしてあげよう」

再び慌てだすアリア。

この子あれだな。　強気なんだけど、攻められるのには弱い。
攻め専門みたいな感じだな。　今度から暴走したらこの手でいこう。

「じゃあ俺はもう教室の中に入るな」

「うん。 あ！ じゃあキンジ、一つだけ」

「何だい？」

「なんで頬つぺたが赤く腫れてるの？」

「……………教務科の恐ろしい女教師2名に殴られたからだよ」

それ以外にも色々喰らっちゃったけどね。

とは言わない。 言えない。

アリアの顔が何か今すごいことになってそうな気がするから。

気を取り直して俺はアリアとは違う後ろのドアから教室内に入る。

向こうのドアだったらアリアが見えるかもしれないだろ。

それじゃあ面白いくない。

転校生つてのは、どんな奴か少なからず楽しみにして待つからな。

「すみません。 色々あつて遅れました」

「理由は分かってますよ遠山君。 ……大変だったんですね」

「俺に憐みの視線を向けないでください！ お前らも向けるな！」

早速このクラスが嫌になっちゃったよ。

もう今すぐ引き返したいんだけど無理なのかな。

無理かな無理かな無理かな無理ですね。

はいすみません、大人しく席に付いちゃいます。

「よおキンジ！ またお前と同じクラスか」

「俺的にはお前がいてくれて少し助かったけどな、武藤」

「ほお。それは何故だ？」

「全く分からん奴より信頼できる奴の方がいいだろ？」

「……………」

何を凍りついてるんだ武藤よ。

後「キンジがまともな事を言ってる」とか言うの止めるよ！

折角いい事言ってやったのになんだそれは。

憑依前のキンジ君だって少なからずお前には信頼してたんだぞ。
だったら俺も信頼する。うざくも思っけど。

「うふふ。静かにしてね。じゃあまずは去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよー」

それだけ聞くとクラスはざわざわと騒がしくなる。

今の先生の言い方だったら間違いなく女子だと思う。

おかげで男子のテンションは上がりに上がっているな。

普通はこんな反応をするから放っておこう。

変に「黙れ！」とか言っただけで印象を悪くする必要もない。

しかし悲しいかな。

男子がほとんどバカ野郎みたいに騒いでるのが悲しい。

お前ら女子の方をよく見てみるや。

キモいみたいな目でお前ら見ながら引いてるぞ。

「キンジ！ お前転入生、しかも女子が来るのにもっと騒げよ！」

「騒ぐにしても来てから騒げばいいだろ。それに騒いだら変なプレッシャー与えるかもしれない。だから俺は絶対に騒がん」

「……お前、本当にキンジか？」

「お前の目には俺がどんな風に映っている？」

「根暗で昼行燈じゃない普通の遠山キンジ」

「それが正解だ。分かったら大人しく席に付け」

後なんだ普通って。

憑依前のキンジ君がアブノーマルだって言いたいのか？
だったら武偵高の大体の生徒はアブノーマルじゃねえか。
ノーマルなんてほぼ皆無だぞ。

「それじゃあ入ってきて」

先生が廊下側に声を掛ける。

すると一人の女生徒がドアを開けて入ってくる。

神崎・H・アリア。転校生じゃなくて転入生だったんだな。
そうならそうと言ってくれよ。なんか恥ずかしいじゃん。

ちなみにアリアが入ってくるとクラスがシーンと静寂に包まれる。
だがアリアの顔を見た男子生徒が次々と「可愛い」やら「お友達になりたいたい」やら「是非ともいただきたい」などと言っている。
後最後の犯罪の匂いがする台詞をはいた奴は一体誰だ？
犯罪が起きる前に俺が滅竜奥義使って吹き飛ばしてやる。

だがまあ、何はともあれ同じクラスになれて良かったよ。
でも最上級神のアテムよ。

今回もこのまま終わらせてはくれないんだろ？

どうやら俺の第二の人生はどうやらそんな感じで出来てるらしいかな。

第6幕 武藤に理子よ、少しは自重しておくれ

「先生、あたしはキンジの隣に絶対座りたい」

「（おやおや……懐かれちゃったかな……）」

いきなりのご指名に苦笑いしてしまう俺。

まさか俺ってそんなに気に入られてしまっていたのか？

そこまでの事をしてしまった覚えなど全然無いんだが。

だが俺は正直言ってお馬鹿だった。

どれくらいかと言うと頭がダイナミックに爆発してしまうぐらい。

もはや致命傷と言っても過言ではない……はず。

まあいいよこの際どうでもいい。

いつまで経ってもどうでもいいと思うかもしれないけどね。

で、結局何が言いたいかと言いますとね。

痛いんですよ、クラス中の視線が俺に突き刺さっちゃってるから。

こっ……四方八方からの色々な感情がこもった視線。

正直、裸足でもいいから逃げ出したいぐらいだね。

初めはなんでもかな……とか思ってたんですけどよ。

そしたらあっさりとその理由が判明いたしやした。

要するに俺が転入生と知り合いだったからですね。

昔友人だった奴から聞いた話だと曰く「美少女が転校、または転入

してきてもしその美少女と知り合いだったら絶対に何もするなよ。
飢えに飢えて飢えまくった恐ろしい男共がものすごい勢いで食いつくからな」とか言われた。

この時はコイツ、何言ってるの？みたいな感じでスルーしたよ。

だがまさかこんな状況でその言葉通りになるとは。

人生つてのは本当に分からないものだな。

それでも俺の憑依した後の人生は波乱ばかりなんだけどな。

「（さーて、現実逃避もそろそろ限界かね）」

大人しく自分の置かれた状況に意識を移す。

そうでもないと一生この問題は終わりそうにない。

問題と言うか、尋問のような気がしなくもないが。

さて、一体俺はどのように行動すればよいのか？

取り合えず別に良いぞって言ってみる。

……これはちよつと保留だな。

お互いに何か気があるみたいに思われてしまう。

じゃあそのままだんまりしてるってのはどうだ。

……それじゃあ問題を先送りにした事と変わらない。

っていうかそんな事俺に出来る自信が無い。

とか勝手に考えていた時だった。

急にわぁーっ！と巨大な衝撃波が俺の鼓膜を襲う。

何事かと思い意識を戻すと、クラス一同が俺の方を見ていた。

それはいい！ いや、良くないけどいい！

なんで全員がそんな微笑ましいような顔をして歓声上げてんだよ！

もしかして俺とアリアがデキてるとか言いたいのか、こいつ等は。さつき会ったばかりの人間同士が簡単にくつつくか。

常識を考えろ、常識を。

「よ……良かったな、キンジ！　なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！　先生！　オレ、転入生さんと席代わりますよ！」

いや、武藤よ。

分かったからそんなに俺の手を持ってブンブンと上下に振るな。まるで選挙に当選した代議士の秘書みたいだぞ。　今のお前は。それといい加減痛いわ、さつきまで左肩痛めてたんだからな。

こんな奴でも優等生なのだから信じられない。

この武藤剛気という男は憑依前のキンジ君が強襲科にいた頃にだが、よく依頼の現場へと運んでくれたりしている。

おまけに乗り物と名のつくものならなんでも運転できる特技を持っている。

俺なんかよりも武藤の方がチートな気がしてきたぜ。

俺はチートじゃない（？）けどな。

「あらあら。　最近の女子高生は積極的ねえー。　じゃあ武藤くん、神崎さんに席を代わってあげて。　遠山くんもいいわよね？」

「（そこで普通俺に振ってくるかつ！？）」

もはや信じられるような奴はこのクラスにいないんじゃないのかね？

……いかん！　またムスカ大佐風の口調になってしまったぞ！

は！ 待てよ、まだこのクラスには不知火がいるじゃないか。

頼みの綱の不知火の方へ目を向ける。

不知火は……にこつと微笑むと、瞬きでこう返してきた。

『遠山くん、大変だろうけどがんばってね』

見捨てられたああああああああああああああああああ
！！！！

助けを求めてわずか三秒で見捨てられたぞオイッ！

このクラスで一番信用できる奴に見捨てられたぞ俺！

そこまで俺には運が回ってこないのか！！

マジで俺の右手とかに幻想殺しとか備わってないよな！？

てかホントお前らその「おめでとう」みたいな視線は止めいっ！

いい加減こっちはキレそうになってんだよ！

死にたくないならこれ以上茶化すな。

今度俺の頭の手綱が切れたらこの教室が吹っ飛ぶからな！

「あ、そうだ。 キンジ、これ。 あんたが落としていったベルト」

と、いきなり俺に歩み寄ってきてベルトを渡してくれた。

ああ。 無かったと思ったら体育倉庫に忘れてたのか。

多分倉庫に突っ込んだ時に千切れて吹っ飛んだんだな……えっと……

あの〜アリアさん、一言いいですか。

俺、千切れたベルト渡されても俺嬉しくないんですけど。

「（いや、分かってはいるんだよ。 それが親切心故の行動だって

ことは)」

俺原作のキンジ君みたいな朴念仁では無いからね。ちゃんと人の行為とか恋愛とかその他もろもろの感情読み取れるから。

でもさあ……やっぱ嬉しくないもんは嬉しくないよ。

賞味期限切れのカップラーメンとかくれても嬉しくないじゃん。いや。配られてるところとか見たこと無いんだけどな。でも配ってやりたいと思うのはやはり人の性かな。

「理子分かった！ 分かつちゃった！ これ、フラグばつきばきに立ってるよ！」

俺の隣に座っていた峰理子が、ガタン！ と席を立った。殴っていいですかね？ この頭のおかしい女を。

「うるさいぞバカ理子。まずは脳外科と神経外科に行ってから学校来いよ」

さりげなく本音を混ぜる。

いや、さりげなくではないな。

いやしかしふざけているにも程があるな。

今度機会があればだがその頭力チ割ってやろうか。

「ひどいキーくん！ 理子、どこも悪くないもん！」

「分かった分かった。お前の言いたいことを聞いてから判断する」

「ぶー……じゃあ気を取り直して。キーくん、なぜカベルトをし

ていない！　そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！
これ、謎でしょ謎でしょ！？　でも理子には推理できた！　できちゃった！」

「（一体どんな珍回答が飛び出すのか見物だな）」

アリアと同じぐらい背の低い理子は、探偵科ナンバーワンのバカ女だ。

俺もそう思うよ。

それになぜか話を聞いているとカチンときちゃうね。

……と、まあ一旦俺の私情やらなんやらは置いてと。

あくまでそういう噂が流れているだけだがもはや共通認識だ。

その証拠に、武偵高の制服をヒラヒラなフリルだらけの服に魔改造している。

確かスイート・ロリータとかいうファッションだ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！
そして彼女の部屋をベルトを忘れてきた！　つまり2人は――熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

ツーサイドアップに結ったゆるい天然パーマの髪をぴょんぴょんさせながら、理子は自身の思いついたらしいおバカ推理をぶち上げる。
恋ってお前。

俺の噂知ってるんならそんな事しないことぐらい分かるだろ。

あんまり余計な嘘ばかり言うな。

次々と誤解者が出てくる恐れがあるからよお。

とか思ってた俺の心配は現実の物となる。

いくら高校二年とはいえここはバカの吹き溜まり、武偵高。理子が放ったたった一言の妄言。

それに反応して大盛り上がりをかましてくれた。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に!？」

「影の薄いヤツだと思ってたのに!」

「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏ではそんなことを!？」

「フケツ!」

「(こいつ等もこいつらで絶対頭おかしいよなあ……)」

もはやここまで来るとため息も出ない。

その可哀そうな頭の中を哀れだと思ってやるしかない。

それにしてもお前ら、息があまりにも合いすぎだろ。

武偵高の生徒は一般科目でのクラス分けとは別に、それぞれの専門科目で部活のように組や学年などを超えて学ぶ。

だから生徒同士の顔見知り率はそれなりには高いんだが……

それにしても、こいつ等の息は本当に合いすぎだ。

あらかじめ用意していました! みたいなくらいピッタリだ。

「お前らなあ……」

もつと別の事に力入れるよ。

と言おうと思った俺の言葉は途中で中断された。

なぜか? 答えはこうだからだ。

ずぎゅぎゅん！

鳴り響いた2連発の銃声が、俺を含めたクラスを一気に凍りつかせたからだ。

拳銃を発砲したアリアの顔がかなり赤くなっている。
余程恥ずかしかったに違いない。

だからって拳銃は撃たなくても良かったような気がするが。

「れ、恋愛だなんて……くっだらない！」

翼のように広げたその両腕の先には、左右の壁に1発ずつ穴が開いていた。

チンチンチーン……

拳銃から排出された空薬莖が床に落ちて、静けさをさらに際立たせる。

おバカな推理を見事に吐露してくださった理子は前衛舞踏みたいなポーズで体をよじらせたまま、顔を青くして大人しく着席。

武藤に関してはさつきからぶるぶると震えていた。

……武偵高では、射撃場以外での発砲は『必要以上にしないこと』となっている。

つまり、別に必要ならばしてもいいということ。

ここの生徒は銃撃戦が日常茶飯事の武偵になろうというのだから、日頃から発砲に対する感覚を軍人並みに麻痺させておく必要がある。しかし入学式で発砲したのはアリアぐらいだな。

普通はあんな話は出てこないし、出てきても怒鳴るぐらいだと思うぜ。

「全員覚えておきなさい！　そういうバカなことを言うヤツには……」

それがアリアが武偵高のみんなに発した最初の台詞。
その台詞は後に俺が時々聞くこととなる言葉でもあった。

「——風穴開けるわよ！」

昼休みになり、俺は一人理科棟の屋上にいた。
さすがに休み時間中の質問責めはきつすぎる。
そこで何とか隙を見つけ出して、ここまで避難してきたという流れだ。

「聞いてくるのもアリア関連の事ばかりだからなあ……」

そもそも俺にアリアの事を聞かれても困る。
今朝初めて会ってチャリジャックから助けられてそれから少し話した程度。

個人的な事は何も知らないに等しいのだから。

ため息を交えて少ししょんぼりしていると、何人かの女子が屋上にやってきた。

声に少しながら聞き覚えがある。

恐らくだが、俺のクラスの、それも強襲科の女子達らしい。取り合えず見つかつては面倒なので、俺は物陰に隠れる。

だがこうやっているところかの犯罪者Aみたいだな。

「さっき教務科から出た周知メールさ、2年生の男子が自転車を爆破されたってやつ。あれってキンジのことじゃない?」

「あ。あたしもそれ思った。始業式出てなかったもんね」

「うわ。今日のキンジって不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア?」

1・2・3と並んで金網の脇に座った女子たちは、俺の事を話題にしていた。

それにしても本当に気に食わない内容ばかり話すな。

そう思い、俺は苦虫を大量に噛み潰したような顔をして静かに身を潜める。

「さっきのキンジ、ちょっとカワイソーだったねー」

「だったねー。アリア、朝からキンジのこと探って回ってたし」

「あ。あたしもアリアにいきなり聞かれた。キンジってどんな武偵なのとか、実績とか。『昔は強襲科ですごくたったただけだねー』って、適当に答えといたけど」

「アリア、さっきは教務科の前にいたよ。きっとキンジの資料漁ってるんだよ」

「うつわー。ガチでラブなんだ」

会話を盗み聞きしていた俺はますます気分が悪くなった。
人が知らない所でこそと陰口をたたく。
こついった女子はかなり好かないな。

「キンジがカワイソー。女嫌いなのに、よりによってアリアだもんねえ。アリアってさ、ヨーロッパ育ちかなんか知らないけど空気が読めてないよねー」

「でもでも、アリアって、なにげに男子の間では人気あるみたいだよ?」

「あーそうそう。3学期に転校してきてすぐファンクラブとかできたんだって。写真部が盗撮した体育の写真とか、高値で取引されてるみたい」

「それ知ってる。フィギアスケートとかチアリーディングの授業のポラ写真なんか、万単位の値段だつてさ。あと新体操の写真も」

何だそのふざけているとしか思えない授業は。
本当に大丈夫なのか、この高校は。

しかしそれを差し引いても言いすぎじゃないのか、こいつ等。
いい加減にしないとキレるぞ、俺が。

「ていうかあの子さ、トモダチいないよね。しょっちゅう休んでるし」

「お昼も1人でお弁当食べてたよ。教室の隅っこでぼーんって」

「うわっ、なんかキモぉー！」

「（いい加減にしやがれよ、こいつ等……）」

わいわいと人の陰口を言いながら盛り上がる女子。

それに対し聞いていた俺は怒りを覚えたが、同時に気分も沈む。こんな話されたら普通は気分も沈むってものだ。

しかし、アリアも俺と同じで悪目立ちしているんだな。これは少し話し合ってみる必要があるそうだ。

第7幕 俺がアリアの奴隷？　なんでそうなる？

俺こと遠山キンジは現在、装備科棟の中にいる。
ここは武偵に必要な武器や銃弾を売ってくれたり作ったりしてくれる。

品質も中々の物で憑依前のキンジ君もまあまあ来ていたり。
つといかんいかん。
ついついここに来た理由と別の事を考えてしまっていた。

まあ来た理由は簡単。

俺が昨日頼んでおいた物が出来上がったので取りに来たのだ。
値段はそこそこ高いが今回もまたいい品質との事。

あの人はそういうことに関しての嘘は絶対に言わないので安心だ。

そのまま廊下を進んでいくと、一つの部屋に目がとまる。

『ひらがあや』と平仮名で書かれた表札のついたB201作業室。

ここの部屋の番人に、俺は呼ばれたのだ。

番人って体型では全然無いんだがな。　ハハハ。

「平賀さん。　遠山だ、開けてくれ」

「開いてるから入ってきてほしいのだー！」

中からは子供のような幼い声が聞こえてきた。
どうやらこのまま入ってもいいらしいな。

「了解了解。　それじゃあ遠慮なく入ろうぜ」

誰もいないのだが一応確認を取っておく。

この光景を見た奴なら間違いなく変人とか思いそうだな。
別に思われてもボコれば問題解決な訳だが。

扉を開けて平賀さんの部屋に入るが……うおおおお。
も、物で辺りがかなり埋まっちゃってるんだが。
足元よりも物の埋もれてる面積の方が広いつてどついうことだ。
片付けろや、ここまできちゃったらさすがに。

と思いながらも俺は下の方にいつていた目線を前へ。
すると平賀さんとはつちり目があつた。

……なんでちよつとしたウインクをしたんだ？
俺はロリコン王じゃないからそんな手には引つ掛からないぞ？

「平賀さん、注文しておいた品なんだが」

「もちろん出来てるのだ！」

「早速だが見せてもらつてもオーケーかい？」

「もちろん！ ですよだ！」

そう言う物がいっぱいになっている道具棚をあさり始めたぞ。
……改めて見て思つたんだが……小さいな、背が。
今胸とか思つた奴、それも正解だが取り合えず頭爆破しろ。

「や、やつと届いたのだあー！」

ようやくのことで注文の品を取りだせたらしい。
平賀さんは汗を掻いていて、息も少し乱れている。
だからさっき片付けたほうがいいのでは？ と言つたのに。

……いや、別にそんなことは言ってなかったな。
心の中で思っただけだったよな、俺は。

「でも遠山くん」

「ん？　なんだ、平賀さん」

「なんで急にこんな物を注文したのだ？」

「あゝ……得意な武器なんだよ、コレ」

平賀さんが持つてきてくれた一本の刀を指さしながら苦笑い。

平賀さんは尚も分からないというように首を傾げた。

その姿の面白いのなんの。

まあでも、一番面白いのはそんな質問をされるような武器を頼んだ俺だな。

俺が平賀さんに注文したのは、特殊仕様の逆刃刀。

逆刃刀は武偵なら絶対に知ってはいるが、かなりマイナーな武器でもある。

一体なぜか？

それは、使用する者の数がほぼ0に等しいからだ。

逆刃刀とは本来刃がある部分に峰があり、峰がある部分に刃がある刀の事。

主にこの1点しか普通の刀とは違わないのになぜ使われないのか？
理由は簡単。逆刃刀は斬ることができないが故に使用されていない。

刃の部分が峰ということはイコール物が斬れないと同義。

無論逆に返せば斬れるが、それなら逆刃刀は必要なくなる。
だから使用されないのだ、逆刃刀は。

「???? ますます分からなくなってきたのだ。 遠山くんが刀を
使えるなんて、見たことも聞いたことも無かったのだ」

「そりゃ今まで隠してたしな。 俺が剣術やってたって」

「なぬ！ それは初耳なのだ！」

「いや……………だから隠してたんだから知らなくて当たり前、普通だ
って」

「それもそうなのだ！ やっぱり遠山くんは頭が良いのだ！」

「（……………うん、もう突っ込んだらキリが無くなるから止めた）」

あえて聞こえていない振りをしてやる。

でもこういう優しさって気付かれたら気付かれたで面倒なんだよな。
人間って憐みの目とか向けられたら大半がキレルし。

…… ああ、俺もキレル側だな。 どっちかっていえば。

「あ、それとちゃんと言った通りには出来たのか？」

「もちろん！ バッチリですのだ！」

「そうかい……………ちなみにこの逆刃刀のお値段の程は？」

「うーん、逆刃刀だから値段は安いから……………四万円ちょうどなのだ」

「お、意外と安い。八万円ぐらいだと踏んでいたんだが」

取り合えず先に四万円を支払っておく。

しかしあまり金に余裕が無いのもまた事実なんだよなあ。

何かいい依頼でも受けて金を貰わないとやっていけん。

人間、一番では無いにしろ金は必要だしな。

「それで、俺の本命は」

「え〜と……ごめんなさいなのだ！」

「まだ出来てないのか？ 火炎瓶の方は？」

「どうしても遠山くんが注文した仕様になると難しいのだ」

ちよつとしょんぼりしてしまう平賀さん。

別に逆刃刀出来たんだから今度でもいいんだけど。

どうせ滅竜魔法の使いどころなんて限られてるし。

あくまで頼んだのも念のためって意味合いが強いからだっただし。

「じゃあまた今度でいいよ。今日はどうもありがとさん」

一言二言だけ呟いてその場を後にすることに。

あんまり言い過ぎてても良いことなんかないしな。

それに……部屋が散らかりすぎてるのも計算してるんだろう。だったら他言無用ってやつだろう。

平賀さんのすごさを改めて垣間見たような気がする俺だった。

「ただいまー」

俺の部屋には自分一人しかいないのだが、そこは習慣というやつ。まあ何はともあれ、自分の部屋に戻ってきた俺は荷物をソファに置く。

そしてようやく一息をつくのだった。

もう夕方になっており空も夕焼け色に輝いている。

正直な話、もっと早く帰ってこれた……はずだった。

だがここでも俺の運の悪さが発動。

クラスの面倒くさい連中に捕まってしまいそのまま話していたのだ。主に教室でUNOやったり遊戯王やったりゲームやったり。

なんだかんだ言いつつも俺ははまってしまい、そのままずっと話しながらダラダラと遊んでいたらすっかりこんな時間になってしまった。

今回は運の悪さと自業自得が両方発動したな。

自業自得が発動するって言うのかどうかは別の話として。

「それにしても、本当に広いなあ」

この部屋は憑依前のキンジ君が今年の一月に暮らし始めたみたいだ。ここは本来四人部屋らしいが、キンジ君が転科した事と、たまたま相部屋になる探偵科の男子がいなかったことが重なり一人で贅沢に使っている。

まあキンジ君にとっては幸福だろうね。

彼は武偵高を良く思っていない上に平穏が好きだから。

でもさすがに行きすぎはひどいとも思う。

「（しっかし、本当に静かだな）」

俺が動かなければ音などあまり聞こえはしない。

こういった静かな一時は憑依前だったら一日三時間ぐらいは欲しかった。

まあ今こうやってこの世界に来てるんだからもう元の世界には行けない。

……俺の妹や弟は元気でやっているんだろうか。

今となってはそれだけが唯一の心残りかもしれないな。

しかし、あのチャリジャックは本当に気に入らない。

あの件に関しては俺が拾ったセグウェイの残骸を鑑識科が今日からさっそく分析しており、今俺が所属している探偵科でも調査を始めている。

『武偵殺し』の模倣犯……恐らくは爆弾魔とかいうヤツだな。

爆弾魔とは、この世で最も卑劣な犯罪者の一種で、大抵ターゲットを選ばない。

無差別に爆破を起こして人々の注目を集める。

そこから世間に自分の要求をぶつけるのが一般的とされている。

正直な話、俺はそんな奴らは許せない。

自分の目的のためだけに関係の無い人達を平気で巻き込む。

これを卑劣と言わずになんと言うのだろうか。

聞く奴によって考え方も思う事も信じるものも違うから、俺の言っている事は単なる偽善者の吐く妄言とも思われるかもしれない。それでも俺は許せない、何があるうとも絶対に。

ピンポン。

そこまで考えていた思考は急に中断された。
誰かが俺に用があつて来たらしいな。

あまり気分は優れないが…… 居留守を使うのは不味いな。
相手を怒らせるかもしれないし出てみるか。

俺はゆっくりとだがドアの方へと歩み寄る。

ドアノブを回し、これまたゆっくりとドアを開けた。

「はいはい。 遠山キンジだけど、一体どちらさんですか？」

「あ、キンジ」

「？ アリアじゃないか。 どうしたんだ？」

俺のところにも珍しい来客が来たものだ。

まさか会つて一日も経っていない女子生徒が来たんだからな。
憑依前のキンジ君ならごく日常的にあつてそつだ。

周りの評価ではやたらと女性を落とすことが上手いと評判だし。

「取り合えず入ったら？ 外はまずいだろ」

「お、お邪魔します……………」

何やらアリアは緊張しているようにも見えるぞ。

……もしかして男とあまり接したことが無いのか？
現在進行形のキンジ君（俺）同様に。

まあアリアと俺はそのまま部屋へ入る。

アリアの方はトイレを見つけると小走りで入った。
見てて妹みたいに感じてしまうのはなぜだろうか？
仕草が似ているからかな、俺が出した答えでは。

だがまずは玄関に置かれっぱなしのトランクを運ぶ方が先か。
っていうか、これ明らかにブランド品だし。
傷つけないように運ばないとな。

「んー……にしても、なぜにトランク？ 今日泊っていく気なのか？」

一旦スペースのあった場所にトランクを置く。
しかし……ここは男子寮、あまり関心はしないな。
まあ本人がしたいって言うんなら止める気はないけど。
そこに白雪が来てあつという間に修羅場に変貌。
ははは………実際にありそうで上手く笑えないぞ。

「キンジって、ここに一人だけ？」

「ああ。 入る予定の奴が一人もいなかったからな」

トイレから出てきて手を洗ったアリアは部屋の様子を窺っている。
別に思春期男子が持っている本なんて一冊もないぞ。
もちろん思春期男子が好きそうなゲームやDVDもだ。
憑依前のキンジ君と憑依後の俺。
どちらもそういった物には全然興味関心が無いから。

「それで今日はどっいった要件だ？」

「え、えっと……左肩は大丈夫なの？」

「あゝあれ。何か知らない内に治ってたから心配ない」

「そ、そう。良かったわ」

ふー……と安堵の息をはくアリア。

朝にも言っただけで罪悪感なんて感じることも無いのに。悪いのは受け身を取り損ねてしまった俺なんだ。

やっぱり強襲科に戻って訓練するべきかね。

「でもそれだけじゃないだろ？ここに来た理由」

間をあまり開けずに尋ねる。

アリアには悪いけど、今日の夕食も作らなければならない。短縮が可能な時間はなるべく短縮。

今も昔も変わらない、俺の中の決まりごとの一つだ。

「う、うん……キンジ」

「なんだ？」

くるっ——。

その身体を夕陽に染め、アリアは俺を真っ直ぐに見てくる。長いツインテールが、優美な曲線を描いてその動きを追う。

「——キンジ。あんた、あたしのドレイになりなさい！」

俺の思考が硬直したのは、言うまでも無いだろう。

第8幕 俺はお前を見捨てない（前書き）

キンジ君がちょっと男になります。

まあ相変わらず駄目文のままなんですけどね。

第8幕 俺はお前を見捨てない

……えっと……ちょっとちょっと待ってくれ。

現在の状況がいまいち理解できないんだが。

なんで俺は今日いきなりあつた女生徒に

「あんた、あたしのドレイになりなさい！」とか言われてるんだ？

何か俺最近この女生徒に嫌がらせみたいなさしたっけ。

いや、してないしそもそも会ってない。

しかも今日も朝の一件だけでほとんど会話なんかしてない。

じゃあ何故俺は奴隷になれとか言われたんだろうか。

………はうあつ！

もしや最近の女子は男を奴隷にするような習慣でもあるのか。

もしくは今現在流行のファッションみたいに流行中なのか。

それだつたら別に奴隷になってもいい………訳無いだろうが！！

無理無理無理無理無理無理無理絶対に無理だから！

奴隷としての生活とかマジで嫌だからね俺！

奴隷にされるぐらいなら俺自殺しちゃうよ！

うんすいません！ 嘘ぶつこいちゃいました！

俺は決して自殺なんかしようとも考えないしする度胸もありません！

喰らえ！ ハイメガキャノン砲——！！

「（………さて、おふざけはここまで。 真面目に考えてみるか）」

いきなりの真面目モードですまないとは思っ
ても本当に耐えてくれ。

これは今後の俺の身に重大な問題を抱えるかもしれんのだからな。
取り合えず俺は疑問を片っ端から考えていくことにした。

それでも俺は探偵科に所属する武偵。

まずは自分で考えることが何より大切なのだ小さい頃に教わった
気がしなくもないがするような感じもする。
まあ要するに考えますってことだよ、うん。

「（まず疑問なのはアリアは推測だけだから良く分からないが多分
Sランク。 実力の方は全然申し分ないぐらいのレベルだ）」

取り合えず引つかかった部分はその部分。

ランクとは、俺が知る限りでは武偵の強さを示す物差しのようなもの。
の。

下から順にE、D、C、B、A、S、Rと七階級ぐらいある。

アリアはSランク指定なので上から二番目。

一番じゃないなら大したことは無いとか思った奴。

残念ながらそれは違うぞ。

思ったり言ったりするのは簡単だがこのランクとはなかなかバカに
出来ない。

ランクが一つ違っただけでも強さは全然違うものだ。

Sランク武偵はAランク武偵3人が束になっても敵うかどうか分
からない。

もはやRランク武偵なんか論外中の論外だ。

世界で七人ぐらいしかないとかどれだけ強いんだよ。

Sランク武偵が五十人相手でも正直余裕だと思っ。

もうあれは化け物の息だな。
竜を倒すための魔法を使う俺が言うのもなんだけど。

……そろそろ話を戻すか。

結局俺が何を言いたいかと言うとだ。

今のアリアには奴隷なんかいらなくてことだ。

いやまあ普通誰でも奴隷なんかいらなとは思っただよ。

そこで俺は考えた。

多分アリアの言ってる奴隷は「パートナー」って意味だと。
それだったらなんとなく辻褄が合う。

主に俺の頭の中で考えている空想の答えという話だが。

「（だがもしそれが正解の場合は……）」

正直な話、俺みたいなEランク武偵をパートナーにはしない。
でもそうしようとするのは恐らくSランクの頃の成績を見た。
それで俺の所に来ていきなり奴隷宣言。
パートナー

……当たってるかな、これ。

自分で考えてみたけどこれぐらいしか思い浮かばないし。

「（……一旦飲み物でも飲んで考えるか）なあ、アリア」

「何？ キンジ」

「飲み物入るんだが何か飲みたいものとかあるか？」

「コーヒー！ エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！ 砂糖はカンナ
がいい！」

エスプレッソまでしか聞いたことが無い。

そもそもこの部屋にはインスタントコーヒーしか無いぞ。

…… また今度パソコンで調べて取り寄せておこうか。

そう思いながらも俺はコーヒーを入れるためにキッチンに向かった。

しばらくして俺はキッチンからリビングに戻る。

自分の両手に二つのコーヒーが入ったカップを持ちながらな。

「はい、お待たせ」

「??」

俺がインスタントコーヒーを出すとアリアはカップに鼻を近づける。
そしていきなり臭いを嗅ぎ出した。

…… もしかしてインスタントコーヒーを知らないのか？

いやでも知らないはずはないんだがなあ。

だってインスタントコーヒーって言ったら庶民は絶対に知ってるし。

「これホントにコーヒー？」

「コーヒーはコーヒーだけどアリアが言ってるやつとは違うね」

「あれ？ あたしってエスプレッソ頼まなかったっけ？」

「それしか無かったんだ。 今度また取り寄せておくから今回は我慢して」

苦笑い交じりに頼む。

結果的には応じてくれて……まあコーヒーを飲んだ。
そして首を傾げた。

当たり前である、インスタントコーヒーを知らないんだから。

「ギリシャコーヒーみたいな味がする……んーでも違う」

「インスタントコーヒーだからな。不味いかもしれないな」

と、一旦和んでいる所悪いが本題を出させてもらうぞ。

こつちもそろそろ夕飯作らないといけないし。

問題は早めに解決しておいてそんな事は無いって今も昔も言う。
嘘ではあるが。

「それにしても……ドレイかあ。ところで何で俺を奴隷にしたい
と思った？」

するとアリアはカップを持ったまま、紅い目を動かしてこつちを見る。

この場合だと「わかんないの？」って言われそうだ。
ははは、さすがに無いかそれは。

「わかんないの？」

「ん……正直な所、いくつか思いつく点はある」

「ふん。じゃあとりあえず言ってみて」

「まずは俺が過去にSランクだって分かったからじゃないかと」

「正解。朝の時もあればSランク並みの動きだった」

そこまで思ってもらえるのは嬉しい。

素直に嬉しいと思えるのは久しぶりだ。

いや本当に。

憑依前の生活はもうあれは思い出したくないぐらい影だった。

何がって？ 俺がだよ、影だったんだよ。

……げふんげふん。

本当にすまないとは毎回思っている。

でも多分自重とかそういうのは一切無理っばい。
だってそれが俺だし。

「……………すいた」

「うん？ 何だった？」

「おなかすいた」

そう言いながらアリアはソファの手すりに身体をしなだれかけさせた。

あらら、話題変えられちゃったか。

まあでも仕方ないかもしれないな。

もうそろそろ七時ぐらいいきそうだし。

「なにか食べ物ない？」

「まだ夕飯は全然作って無いから無いなあ」

「じゃあお菓子でもいい」

「こらこら。いい訳無いだろ。……しょうがないな、コンビニに行くか」

「コンビニに？ ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ、行きましょ」

「お菓子は買うなよ。ちゃんとご飯類だぞ」

「わ、分かってるわよ！」

アリアは顔を真っ赤にして怒鳴る。

それがまた面白かったため大笑いしそうになるが何とか耐えた。風穴開けられたらたまったものじゃない。

新聞の一面記事に乗ってしまいそうな未来しか待っていないさそうだ。

俺が再び苦笑いしていると、アリアはバネでもついているかのようにぼーん！ とソファから大きくジャンプをして立ち上がった。そして俺の方にとんと歩いてくる。

……近い……顔が、近すぎるぞ。

「ねえ、そこって松本屋の『ももまん』売ってる？ あたし、食べたいな」

そしてまあ、今現在俺とアリアはテーブルに座って食事を取っている。

アリアはにこにこした顔をしながらももなんをなんと七つも買った。ももまんとは一昔前にちよつとブームになった、桃っぱい形をしただけの要するにあんまんなんだが、これじゃあもはや買い占めたと

いうレベルだ。

というかもはや夕飯に食べるものじゃないだろ、ももまんは。

まさかそれを一日では食べないよなとか思っではいたんだが、テールブルに着いたアリアはどんどんももまんを平らげて現在五個目。その小さな体のどこにそんなににももまんが入るんだ。

とか思った時もあったがそれもすでに過去形。

今は現在進行形。

この辺の理解はちゃんとしておいてほしいな。じゃないと置いていかれるぞ、世間一体の流行とかに。

「ところで、ドレイって一体どういう事？」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

やっぱりパートナーっていう意味だったか。

……ん？ 待てよ、アリアの名前って『神崎・H・アリア』だったよな。

神崎ってどっかで聞いたことがあるような気がする。

一体どこで……はっ！ 今完全に思い出したぞ！

そして繋がったぞ！ 俺がパートナーに誘われた理由が！

読者の皆さま、ここからはやや重い話になると思う。

まあ嫌な人は回れ右することをお勧め。

良い人は見て行ってくれ。

「アリア、単刀直入に言うぞ」

「な、何よキンジ……急に真面目モードになって」

「お前が俺をドレイ、いや、パートナーにしたいのは……母親のためだろ」

静寂が辺りを支配する。

アリアはしばらく目を見開いていたが、やがてガタンツ！と大きな音を立ててテーブルを叩く。

そして二丁のガバメントを抜き、俺の眉間に付きつけた。その目が怒りに満ちているのは気のせいではないだろう。

……そうか、やっぱりあの人の娘だったんだな。

「あんた……なんでそれを知ってるの？」

「ニュースで見ただけだよ。ガバメントを下してくれないか？」

俺は両手を上げて戦闘の意思が無いのを伝える。

アリアも少し疑いながらもガバメントを下す。

良かった良かった、まだ信じてくれてはいる。

ここでハッキリさせといた方がいいよな。

「神崎かなえさんだったよな。今懲役864年、事実上の終身刑で刑務所に捕まっている人。多分そのガバメントの持つところに

描かれている女性もかなえさんだろ？ ひどい話だよな、あんなのは全部冤罪のはずだ」

「……よく分かったわね。 誰にも言っていないのに」

「ニュースで見ただけって言ったろ。 でもそれでハッキリした」

「何がよ」

「お前がなんでパートナーでは無くあえてドレイだと言ったのか」

「っ！」

びくつと肩が大きく動く。

ごめんな、アリア。

でもちゃんと明確にしないといけないんだ。

これから先に進むためには。

「俺も朝見た限りではアリアの腕前はSランク。 その歳からじゃすごい腕だ。 でも駄目だよな。 いくらSランクでも上には上がいるんだから。 自分だけの力じゃどうしても限界という巨大すぎる壁にぶち当たる」

「……………」

「それでもかなえさんの冤罪をどうにかするには自分に合わせてくれるパートナーの存在が絶対に不可欠。 そこで元いた武偵高でも様々な人物とパートナーになった。 ……でも思うように自分に合わせてくれる人が見つからず、最高裁の期限も迫っている」

「……………」

「そこで出会ったのは俺。でももしかしたら誘ってもまた昔のように断られるかもしれない。また今までの人達みたいに自分の元から去って行ってしまうかもしれない。そう考えたお前はあえてパートナーではなくドレイと言った。自分の元から絶対に離れられなくさせるためにあえて……まあこんな所かね」

「……正解よ。全部当たってる」

「そりゃどうも。これでも俺は探偵科だからな」

「それで……キンジもあたしのことを笑う？」

途端にアリアの目から涙が滲んでいるのに気付く。

あ、あれ……俺ってもしかしてすごい悪役？

昔から正義の味方とかやってる一族に生まれたにも関わらずか？

いやそれよりもだ。

『キンジもあたしのことを笑う』って……一体どういうことだ。今の話のどこに笑う要素があるっていうんだ。

普通はすごいとかは思ったりはするが笑いはしないぞ、絶対に。

「昔に一人だけ、たった一人だけ……今のキンジみたいに言い当てた人がいた。その人とあたしはかなり仲が良かったし、最高のパートナーだと思ってた。でも、今みたいに話が全部すんだ後に言われたの」

「……なんて？」

「『お前みたいな奴に出来るわけ無いだろ。夢を追うのも対外にしろ』って」

「っ！……あり得ねえだろ」

「その人にこうも言われた。『やつはお前みたいな協調性が皆無ですぐ外ツ面にだまされるバカ女の母親なんだから、よっぽどの犯罪を犯したゴミ屑なんだろうな』って。その人がそういった事を全校生徒に吹き込んで、あたしの居場所はなくなって……この東京武偵高に来たのだからそういう理由が積み重なったからだし」

ふざけてる……絶対にふざけてる。

アリアが戦ってるのは恐らくは『あの組織』の奴ら。実際に戦った事はないがかなりやばい奴ら。

きっとその戦いはいつも命がけのものだろう。

人が命をかけてまで必死になってやってるのに……夢を追うのも対外にしろ？ アリアの母親がよっぽどの罪を犯した奴？……だと。

「でもそうかもしれない。あたしみたいな『それ以上は言っないっ！』」

バキバキバキバキバキバキバキツツ！！！！

豪快な音を立ててテーブルが真っ二つになる。

アリアは目を見開いて少し怯えてしまっているのも分かるな。しかしそんな事は構うものか。

今の俺の中に生まれた感情、それは「怒り」。

今の俺の顔を見たら小学生でも泣きだしてしまうかもしれない。だが……それも今は全然気にはならない。

……やってやろうじゃないか。

アリアの母親、かなえさんの無罪を証明してやろうじゃないか。そんなでもってアリアの元・パートナーを殴る。

絶対に何年かかってでも土下座させてやる。

絶対に、絶対にだ。

「アリア、俺はお前のパートナーになる」

「えっ!？」

「そして証明するぞ、かなえさんの無罪を」

「で、でも……」

「お前はそのために来たんだろ。安心しろよ、俺はお前を裏切らないし見捨てもしない。俺は助けの手を差し伸べられたら迷わず取る。相手がどんな犯罪者だろうが構わない。俺は逃げもしないし立ち止まりもしない、だからお前も立ち止まるな」

「……………」

「それとさ……今は泣け。無理に我慢しなくていいんだよ」

俺は怒りの表情を消し、普段の俺に戻る。

そして優しく……優しくアリアの小さい身体を抱きしめる。

もう心は結構すり減ってるみたいだし。

今みたいな時間は他人に甘えていいんだよ、アリア。

お前は強いと同時に繊細で弱い女の子。

いくら表面上は強がっても、心の中では悲しむような女の子なんだ。
無理をしすぎればいずれは壊れてしまう。
そうならないためにも甘えられる奴には構わず甘えろ。

「俺以外誰も聞いてないから泣け。 弱さを見せてもいいんだよ」

「……………うぁ……………うぁぁぁぁぁぁん……………」

とうとうアリアは俺の服に頭をうずめて泣きだす。

……………さてと、取り合えずやる事は決まったな。
まずは情報収集をする。

そして……………冤罪をきせた犯罪者どもをぶっ飛ばす。
今の俺に出来るのはそれぐらいしかないからな。

第9幕 猫探しでも賑やかです

「ほれアリア。 もう起きないと」

時刻はすでに次の日の朝7時10分ぐらい。

今日は別に休みでも無いため普通に授業がある。

なので俺は未だに寝ているアリアを起こしに来た。

しかし昨日あれだけ泣いたのだから、疲れているのかもしれない。

あれからアリアは30分ぐらい泣き続けた後にすぐに寝た。

それからしばらく経って白雪が家を訪問してきたからさあ大変。

何とか言い繕って家の中に入るのを阻止した。

その時の目が全く温度の無い冷たいものだった事は置いておこう。

何やら詮索してはならないような気がするからな。

「アリア、起きないと遅刻しちゃうぞ」

「うーん……………あ、後五分……………」

「超やべえよ！ 久しぶりに聞いたよその台詞！」

思わず大声を出してしまった。 不覚。

だがしかし、まさかアリアがその台詞を口にするとは。

世の中生きていれば不思議な光景に出会えるものらしい。

ちよつとだけ得した気分だ…………… ってそうじゃない。 起こさなないと。

「アリア。 起きろって。 朝食が冷めるぞ」

「朝ごはん……分かった。うん……」

朝食という単語につられたアリアさん。

うん決めた。

しばらくはこういう起こし方でいってみよう。

「キンジ、お腹すいた」

「分かった分かった。取り合えず顔を洗ってから朝食を食べよう」

「うん。分かった」

……今気付いたけどかなり素直だよな。

昨日の教室で発砲したのと同じ人物とは思えない。

俺の前だけじゃなくて日常でもああやって素直になれたらなと思う。
そうすればすぐにでも友達が出来るだろうに。

なんてことは思っけていても口には出せない。

もしも言おうものならたちまちハチの巣にされて人生終了。

またあの髪のところに行かなければならなくなってしまう。

そういえば今ので思い出したが、あいつ知らない物送ってきすぎだ
ろ。

武偵弾千発はまだいい、百歩譲ってもまだいい。

だが睡眠薬や手錠といった拘束具はどうかと思うぞ。

何を期待しているのかは知らないが絶対に俺はそんな事はしない。
もしやったら……やった人に土下座しよう、しないけど。

とか考えてたらアリアが戻ってきたので朝食タイム。

それから身支度を整えて武偵高へ。

行く途中のバスの中で大変な目に会ってしまったが。
もっと正確に、そして具体的に話させて？
すいません、【禁則事項】って事で勘弁してください。

ところ変わってようやく終わった今日の学校生活。

展開急に早くないと言わないでくれよ。

こっちにだってこっちの都合があるんだからな。

とかバカな事を考えつつも俺は5時間目以降の時間を活かして今後の事に付いて色々と考え事をしたりすることや対策を練る時間に当てる事にした。

武偵高では1時間目から4時間目までは普通の高校と同じように一般科目の授業を行い、5時間目以降からはそれぞれの専門科目に分かれて実習を行うことになっている。

今頃アリアは強襲科で戦闘訓練を受けているのだろう。

ならじつくりと考え事が出来るだろう。

気分転換もかねて探偵科の簡単な仕事の依頼を受けてきた。

「（しかし、さっきから誰かに見られてるような気がする）」

まあ、見てる奴とか大体分かるんだけどね。

ただ何故見られてるのが全く分からない。

つまりは理由。

俺おかしいことなんて何もしてないはずなんだけどなあ。

「キーンジ」

「（……おかしいな。強襲科で訓練受けてるはずなのに）」

探偵科の専門棟を出たところで会った人物はまさかのアリア。
しかし何故俺がここにすることが分かったのだろうか。

……待てよ……ああ、そういうことか。

「アリア」

「何？」

「別に俺は逃げないぞ。わざわざレキに『鷹の目』をさせなくても」

「……ホントにあんたは鋭いわね」

「それ程でもないさ。 たった今気付いたばかりなんだからさ」

『鷹の目』とは狙撃手の優れた視力を生かして遠隔から対象者を見る——確か、俺の記憶が正しければ監視任務の隠語のはずだ。報酬も単位も安いから、普通は未熟な狙撃手がやったりする。だが今回の場合は違ったけどさ。

これは俺の推測だがやっぱりアリアもまだ不安らしい。
俺が自分の元から去ってしまうのが。

そこで探偵科から出てくる所に待ち伏せできるように頼んだのだから、レキに。

あいつは無口ながらも優秀な狙撃手の一人だしな。

今回も『鷹の目』なんか完璧にこなしてしまうという信頼があつてこそ。

憑依前のキンジくんもそれぐらいの信頼を周囲から得ていて欲しかった。

今日改めて人望の無さがハッキリ分かったぜ。

「しかしいいのか？ 強襲科の授業をサボっても」

「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えてるからいいの」

そこはさすがと言うべきだろう。

すでに卒業できるだけの単位を揃えていたとは。

俺も早い所感覚戻して頑張らないとな。

「キンジ。 あんた普段どんな依頼を受けているのよ」

「最近は受けてないけど少し昔だったらEランクにちょうどいいぐらいのだ」

武偵高の生徒は、一定の訓練期間の後、民間からの有償の依頼を受けられる。

後街で事件の現場に偶然居合わせたら、それを解決しても良い。

それで、それらの実績とか各種試験の成績とかその他もろもろの結果に基づいて、生徒にはA～Eの『ランク』が付けられる。

憑依前のキンジくんは入試の時にはSランクだった。

まああれは白雪のせいで、ヒステリアモードになったおかげだけど。

「あんた、いまEランクなの？」

「1年3学期の期末試験をサボって受けなかったからな。 まあランクなんてどうでもいいじゃん。 もっと大事な事もあるだろう？」

「それもそうね。 ランクなんて確かにどうでもいいけど。 それ
と今日はどんな依頼を受けたのか、教えなさいよ」

「うーん…… 恥ずかしいから教えられない」

「キンジ、風穴開けられたいの？」

イラッとした表情のアリアさんが拳銃に手をかける。
これは大人しく従っておいた方が賢明なようだ。
主に俺の命と信頼と明日のために。

「今日受けた依頼は猫探しだよ」

「猫探し？」

「青海に迷子の猫を探しにな。 報酬は一万。 0・1単位分の依
頼だ」

探偵科の掲示板に張り出されていた中で一番地味な依頼。
しかしそれでも俺はこの依頼を選んだ。
何せ俺はこっちの世界での初めての依頼だったし。
まだこの体に慣れきっていない感じもするし。

さすがにこれにはアリアは興味を失ったと思った。
しかしどうやら付いてくるようだ。
なんで分かったかつて？

目に『あたしも付いていくから』って映ってたから。

「それじゃあ遅くならない内に行くか。 行こうアリア」

「えっ？」

「『えっ？』じゃなくてさ。一緒に行こうって言ってるんだよ」

「……昨日も思ったけど、あたしなんかと一緒に迷惑じゃないの？」

またまた急に何を言ってるんだいこのお嬢さんは。

別に迷惑なんて思ったことなんかない。

ちよつと変わっているなとは思った事はあるけども。

「今日の朝のバスの中でも馬鹿にされてたじゃない」

ああ……………今日の朝にあつたあれね。

詳しく説明すると今日俺とアリアはバスの中で馬鹿にされた。

何でも根暗な俺と一人ぼっちのアリアが一緒にいたのが大層面白かつたらしい。

散々言いたい事を言いまくってくれたよ。

その後アリアがちよつと涙目になってたから俺キレちゃったよ。

まさか力加減をミスツて電柱にヒビを入れてしまうとは。

まあ、そんな事を公衆の前でする屑な輩を俺が逃すはずもないぞ。

きつちり昼休みに体育館裏に呼んで全員ボコボコにしたよ。

何か一人前歯が折れたとか言ってたな。

そのおかげで授業中にも関わらず蘭豹に殴られたけど。

そしてなんだかんだあつて蘭豹の中の俺のイメージがアップしたとか。

そしてこれは武藤から聞いた話だが……何でもその話題を聞いた1年女子の間では現在俺の株がかなり上がっていると云っていた。面倒事にならないでくれると助かる。

そして俺の株もあまり上げないでくれると尚助かる。

今日武藤に睨まれっぱなしだったから怖かったんだよ。

後3年は俺の事を怖がっているらしい。

何でも今日潰したのは全員Aランクばかりだったとか。

「そんなの気にしないでいいさ。あの連中もボコツたし」

「……いいの？」

「いいつて。それにもう俺達は『パートナー』同士だろ？」

「……うん！」

笑顔で頷いたアリアを見ていると俺も自然に笑ってしまう。

そして俺はアリアを連れてモノレールで青海まで移動。

かつて倉庫だった青海地区は再開発され、今は億ションとハイソなブティックが建ち並んでいるようなオシャレな街になっている。

開発するのは結構だが自然破壊だけは避けてほしい。

人間は自然の恵みが無ければ生きられない仕様だからさ。

「で、猫探しはどういう推理で探すのよ」

「本当は依頼主の人に普段猫がうろついている場所を聞くのが一番いいんだけど、今回はちょっとした運動も兼ねてしらみつぶしに歩くことにした」

「……キンジ、おなかへった」

「昼休みには何か食べなかったのか？」

「食べたけどへったのっ」

燃費の方はどうやら悪いようだ。

「あ……お金持ってない」

財布を探したアリアはショックといった顔をする。

そして俺の方を見てくる。

おごってくれってか……それならそうと言えればいいのに。

そういえば俺の方も依頼を選んでいたので昼は食べていない。
だったらちよどいい。

手軽に食べられるマックでも行くかね。

アリアが注文を頼んだギガマックセットを俺が買って戻ってくると

……

アリアは、高級ブティックのボンキュッボンなマネキンを見ていた。
マネキンが着ているキラキラしたサニードレスと自分の体を交互に見ている。

……なるほど。

ああいうものに女性は憧れるものだしな。

アリアとて立派なお年頃の女の子。

そんな感情があってもどこもおかしくは無い、むしろ正常だ。

「アリア。 買ってきたぞ」

「あ——ち、ちがうの！ あ、あたしはスレンダーなの！」

「別に体の事なんか言っていないって」

俺は真っ赤になったアリアを再び連れて反対側の公園に入っていく。それから近くにあったベンチにお互いが座った。

しかし何か忘れているような……あ。

「アリア。 それとここではお互いあまり近づかない方がいい」

「なんでよ」

「ここ、有名なデートスポットだから」

現に今も公園には何組かの若いカップルがいる。

ここは海も近いし、新しくキレイだし、いわゆるデートスポットだ。

別に俺は狙ってここにアリアと共に来たわけではない。

ただ単に俺の頭からそんな情報が消えていただけだ。

「あ……」

と声を出したアリアは向かいのベンチに座っている大学生らしきカップルが寄木細工みたいにふっついていてのを見てポテトをくわえたまま硬直している。

「こらこら、ちゃんと食べてから硬直しなさい。

この注意は自分でも何か間違ってると思ってるから安心しな。

「……………う。う！」

「……………恋愛に興味があるのはいいが、ちょっと慌てすぎじゃないか？」

だってもう16歳や17歳だぞ。

ちよつと恥ずかしがるくらいならまだしもこの慌て様。

どこの箱入り娘だよ、お前。

「れ、恋愛に興味なんて！」

「（ない！　って絶対言うよなあ……………このパターンは）」

「きよ、きよ、興味ないっ！　あたしは、れ、恋愛なんて——そんな時間のムダ、どうでもいい！　ホントに、ホントに、どうでもいい！」

だから過剰に反応し過ぎだって。

もしそれで嫌な奴に弱みでも握られたらどうするんだよ。

結局損するのは自分なんだぞ。

ちゃんとしっかりするところはしっかりしないと。

「友達とかに笑われても知らないぞ」

「友達なんて……………いないし、いらないう。言いたいヤツには言わせればいいのよ。他人の言うことなんてどうでもいい」

「それはそれで問題のような気がするが」

じゅるうううううー。

アリアは照れ隠しのためにギガコーラのストローをくわえて思いつきり飲んだ。

ちなみに今飲んだのは俺のコーラだとは言わない。

言ったら怒鳴られた上に鉄拳が飛んでくるのは目に見えている。

そんな理不尽な行為は、あまり喰らいたくないのが性分なもんでね。

一応言っておくと、その後に迷子の猫を発見。

ちゃんと助けて俺は報酬と単位を貰ったんだが……

アリアが神妙な顔で俺を見ていたのが気になった。

何か……嫌な事でも怒らなければいいのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2844y/>

【遠山キンジに憑依？ だが俺は俺のやりたいようにやるだけだ！】

2011年12月2日18時45分発行